

2015年度  
「学生による授業評価アンケート」  
**報告書**

2015年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

**立教大学**

2016年 9月

## はじめに

総長 吉岡 知哉

立教大学の授業評価アンケートの最大の特徴は、そこにフィードバックのプロセスが組み込まれていることにあります。1. 選択肢による定型的なアンケートに加え、「記述による評価」欄を設けて学生の直接的な意見を反映させていること、2. アンケート結果をただ集計するだけではなく、結果に対する個々の教員の所見を求めていること、3. 所見票を全学の学生・教職員に公開していること、そして4. 各学部ごとの総評が報告書の形でまとめられていること。授業評価アンケートの「進化」を生み出してきたのも、このフィードバックのメカニズムにほかなりません。

授業評価アンケートでは、基本的に「一教員一科目」という方針を取ってきました。もとよりこれは、このアンケートが教員の授業力向上のための一施策として始められたという事情を反映しています。授業評価アンケートは、教員による授業方法の自己チェックに資することを第一の目的としていたのです。

けれども同時に注目しておくべき点は、本アンケートが質問項目として、学生自身の授業への取り組み方、学生が授業から得ることができたものを問うていることです。このことは、「学生による授業評価アンケート」が、授業を、教員からの一方向的な知識や技術の伝達としてではなく、教員と学生との相互的な関係において捉えようとする考え方に支えられていることを示しています。

FDと略される概念が高等教育に導入された当初、一部ではパワーポイントをはじめとする情報ツールの使用能力など、問題を教員の技能評価に還元される傾向も見られました。そのような理解は、一方で学生を顧客と見なす教育＝サービス論と、他方で学生を製品とみなす品質管理論と適度に親和しつつ、一定の広がりを見たと言えるでしょうが、本学のFD推進は、そのような流行とは無縁に、授業を教育の一環として捉えるという基本姿勢を貫いてきたのです。

授業評価アンケートの「進化」は、授業を教育の一環として捉えるという、まさにこの点において生じています。それぞれの学部がアンケート対象となる科目を独自に選定するとともに、「学部等による設問」を別個に設定することを通じて、アンケートの結果は、個々の教員の自己チェックを超えて、授業やカリキュラムのあり方の検討のための素材を提供するという役割をも果たしつつあります。

言うまでもなく、授業は、教育という人間の営みの最前線にあって、生身の知性が激しく接触する現場にほかなりません。それに対して授業評価アンケートの結果は常に過去に過ぎない。それにもかかわらず、否、それだからこそ、私たちはそこに表れた数字や言葉から、それらに還元されない何かの読み取ろうとします。その努力が、授業そのものを活性化させていくに違いありません。

本報告書が、教職員はもとより多くの人々、とりわけ授業の最も重要な当事者である学生の皆さんに読まれることを期待しています。



# 目次

## はじめに

1. 本学における「学生による授業評価アンケート」について	1
1-1 目的	1
1-2 「報告書」作成の基本的な考え方	2
1-3 「所見票」について	3
1-4 実施科目の選定方針	4
1-5 回答結果の全学的な活用に向けて	5
2. 授業評価アンケートの実施概要	7
2-1 実施方式	7
2-2 設問項目	7
2-3 各学部等の科目選定方針	11
2-4 実施科目数	12
2-5 実施期間	12
2-6 回答者数	13
2-7 「所見票」の公開	13
3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック	15
3-1 科目担当者	15
3-2 学部等	15
4. 学部等総評	21
4-1 文学部	22
4-2 経済学部	25
4-3 理学部	28
4-4 社会学部	30
4-5 法学部	32
4-6 経営学部	35
4-7 異文化コミュニケーション学部	38
4-8 観光学部	41
4-9 コミュニティ福祉学部	44
4-10 現代心理学部	48
4-11 全学共通カリキュラム	51
4-12 学校・社会教育講座	57
5. 2015年度のまとめと今後の展望	59
6. 2013年度「学生による授業評価アンケート」のデータを用いた追加分析	63
7. 2015年度集計データ（資料編）	71
7-1 回答者数・回答率	71
7-2 学部等別平均値	72
7-3 「グループ集計」科目一覧	84



## 1. 本学における「学生による授業評価アンケート」について

本学における授業評価アンケートは、2004年度から毎年実施しており、その実施目的は開始以来これまで変更しておらず、初年度である2004年度報告書に書かれている通りである。以下にそれを転載する。

### 1-1 目的

本学における全学規模の学生による授業評価アンケートは、2002年7月10日に総長に提出された「全学FD検討委員会答申」に始まる。その中で、本学にとっての最重要FD課題として次の3点が挙げられている。第一に「教員における授業力の向上」、第二に「カリキュラム編成の合理化」、第三に「成績評価の厳正化」である。そして、その中でも緊急性がもっともあるとされたのが第一の課題であり、その中で「授業力向上に向けての具体策」のひとつとして挙げられていたのが「学生による授業評価の制度的実施」である。それを受けて、2002年12月18日付け文書「FDについて—学生による教育評価アンケートの2003年度実施に当たって—」の中で総長は、敢えて「教育評価」という言葉を用い、「個々の科目の授業やその担当教員への評価をこえて、広く本学の教育について、学生の評価を参照したい」と述べ、「学生による教育評価アンケート」をできる限り早期に実施したいとの方針を明らかにした。

それを受けて直後の2002年12月21日には早くも全学教務委員会FD専門部会の第1回部会が招集され、年度をまたいで検討が続けられた。その過程で、2003年度実施は見送られ2004年度実施を目標とすること、施設その他の教育条件一般を問うアンケートの前に、授業そのものに目標を絞って問うことなどの合意が形成され、「学生による授業評価アンケート」を行うことが決まった。そして、具体的アンケート項目作成作業が開始され、他大学のものをも参照しつつも、三つの独自案にまとまってゆき、並行して行われていたアンケートの目的や実際の実施方法などの検討結果とも連動しながら、最終的にひとつの案に集約されていった。その結果は部長会に報告され、了承を得て、その後、各学部教授会とのやり取りがあり、2003年の秋に2004年度前期から「学生による授業評価アンケート」を実施することが正式に決定した。そして、2004年度4月から「学生による授業評価アンケート実施委員会」が立ち上げられ、前期と後期に実施された。

その実施の目的は、部会における議論の結果、以下の点にあると考えられるにいたった。

- ① 教員が自らの授業改善を目指す自己研修の資料を得る。
- ② 教員同士が授業に関して相互研修をおこなう機会を提供する。
- ③ 学生の学習姿勢を知るための資料とする。
- ④ 学生の授業への期待のありかを知る資料を得る。
- ⑤ 学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起する。
- ⑥ 学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る。
- ⑦ 大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る。

以上である。

要するに、本学の「学生による授業評価アンケート」は端的に言って、個々の教員による授業を、学生がより充実して学習を進め大学としての教育力が今より一層効果的に機能

することを旨として改善し、その結果として学部・学科としての教育力をも増進することを唯一の目的とする、ということである。そうして、学生をも巻き込んで、本学が知的に活発で、創造性に富み、常に先進的に新しい知を発信し、それに基づく生き方を常に提案し続ける力を保持することができるようになることを最終目的とする。

それに対して、場合によっては教員の活力を削ぐことになりかねない教員管理の視点は厳しく排除される。大学は教職員と学生が相互に自己管理することを前提に、自由に精神活動をおこなう場である。特定の目的のために教職員ならびに学生を管理し、特定の方向へ向けるべく力を加えることは、大学本来の知的創造力を失わせ、ひいては大学が本来持っているはずの社会的役割を放棄し、その負託に答えられなくなることを意味する。その意味で、この「学生による授業評価アンケート」結果のデータは特定の意図を持って処理され、一律の基準の下に評価されることはない。それゆえに、集計データの統計的処理はアンケート対象になった個々の教員に任されることになった。それが所見票に表現されるのである。

このアンケートは大学としての教育力向上を目的としておこなわれるので、学生の自覚を促すことも期待されている。そのことは、一朝一夕に実現させることは難しいかもしれないが、学生たちの評価アンケート結果に対して、各教員がそれぞれの学問的見識を持って所見票で答え、実際の授業に反映する努力が積み重ねられることによって、徐々に現実化してゆくであろう。現在の大学では学生の自主的活動が必ずしも本来期待されているほど十分でなく、大学生の学校生徒化が進んでいると一般に言われている。その中で、学生の主体的参加が教員との関係を変えるきっかけになることを直接に経験することで、学生の姿勢が変化することを期待したい。

さらに、アンケート結果、所見票が公表されることにより、教職員相互間、あるいは教員と学生との間で切磋琢磨する風潮が広まれば、大学全体として、個々の学問研究と教育の活動に根ざした種々の改善が期待される。カリキュラムはもちろん、組織の運営体制や施設なども、このアンケートを手がかりにその評価の俎上に載せられることになってゆくであろう。

この「学生による授業評価アンケート」が、大学の知的エネルギーを構成している教職員相互の関係や教職員と学生との関係、あるいは学生相互の関係などを揺り動かし、多様な観点から相互に力を及ぼしあう結果になることを、我々は心から期待したい。そして、そのことがやや動脈硬化が進行してきた大学という組織にも再び熱い血を通わせ、教職員も学生も本学に集うことこそがその熱い血の拍動を生み、学問に触れることが楽しくて仕方がないという状況を生み出すことを心から願う。

## 1-2 「報告書」作成の基本的な考え方

「学生による授業評価アンケート」は調査である限りその結果がまとめられなければならない。我々はそれを報告書という形で世に問う。この報告書はアンケート対象になった個々の授業が 1-1 で述べられた目的に沿って学生によって評価された結果を総体として、学部・学科ごとに、そして大学全体として、その教育力を評価し、成果の上がっていることに関してはその成果の意味を明らかにし、さらにその成功を維持するための方策を考え、改善が必要なことに関しては、その原因を究明し、その克服のための方法を構築する。そ

して次回のアンケートにその改善努力の成果を問う。

この報告書の構成は以下のとおりになっている。

まず、(1)すでに述べたとおりこのアンケートの目的を明らかにする。その次に、(2)その目的に沿ったアンケート実施の概要を報告する。その上で、(3)統計処理上の技術的方針について、我々の考え方を明示し、データの性格を規定し、将来の調査をも視野に入れた分析方針を提示する。そして、(4)全学的な総評をおこなう。最後に(5)学部やその他の教育組織ごとの総評をまとめる。以上である。

この報告書はあくまで1-1のアンケートの目的に謳われている⑥学部・学科としてのカリキュラムの有効性を測定するための資料、および⑦大学としての教育力向上に必要な方針を立てるための資料を提供するためにおこなわれる。したがって、この報告書には個々の授業やその担当者、あるいはある学科の科目として特定できるような記述は記載されない。

それと同時に、この作業は全体としての③学生の学習姿勢を知るための資料、および④学生の授業への期待のありかを知る資料を得ることにつながる。授業に参加する学生たち自身の勉強に対する姿勢もアンケート項目に入っているため、それらについてはこの報告書の中で、各所で触れられることになるだろう。

これらの目的達成を検証することを狙い、我々は報告書を作成する。ちなみに目的の①と②は次に述べられる所見票に示されるだろう。⑤学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起するという点については、この報告書や同時に作成される所見票（とその集成である所見集）に示されるのではなく、今後おこなわれる将来の「学生による授業評価アンケート」にその成果が示されることになるだろう。

### 1-3 「所見票」について

個々の科目のアンケート結果は、同じ科目の将来の開講の際に生かされるはずである。しかし、一方ではアンケートに答えた学生たちには、将来の授業では直接的にフィードバックすることはできない。そこで、個々の科目のアンケート結果についても、何らかの形で少なくとも当該学生たちには公開される必要がある、と我々委員会は考えた。その際には、単純にアンケート項目の集計結果だけを公開する方法と、それに対する教員の所見をも添えて公開する方法が考えられる。

我々は個々の科目担当者に、自分の科目についての自己点検・評価という意味でアンケート結果のデータを読んでもらい、「授業評価に対する担当教員の所見」、「自由記述欄に対する担当教員の所見」、「改善に向けた今後の方針」を書いてもらうこととした。この3つの教員記述にアンケートのすべての項目についてその結果を帯グラフに表したデータを付したものを「所見票」と称した(p.18参照)。そして、この所見票を学生に公開することにした。

所見票を書くことはアンケート対象教員にとって負担にはなる。しかし、我々は敢えて対象となった教員全員に所見票作成を依頼した。なぜならば、自分の授業についての学生による評価が出たならば、それについての対処を明確に行い、アンケートに協力してくれた学生たちに直接回答することも、授業担当者である教員の義務だと、我々は考えたからである。所見票はそのすべてが1冊にまとめられて所見集とされ、学生に対して学内で公



開されることになる。

所見票の狙いは以下の点にある。

- ① 教員がアンケート結果についてそれを直視し、自らの見解を発表する場を与える。
- ② 学内で公表されることによって、学生に直接回答する機会を与える。
- ③ アンケートに含まれる自由記述についてはデータ化できないので、教員の直接的コメントを通してその内容を明らかにすることを求める。
- ④ 改善に向けた明確な決意と工夫を書くことにより、次回アンケートとの比較を行い易くし、具体的授業改善の実現を可能にする。

以上である。

①については、教員側にも、もし学生からいわれのない不評や批判があった場合には、弁明する機会が欲しいとの声もあった。また、所見票を書けば、アンケート結果をつぶさに直視し、それに向き合って、自分に取り入れる契機とすることができる。さらに、データの多様な集計を当該教員に任せ、教員の必要に応じた分析を行い、納得の行く分析結果を出してもらうことにも意を注いだ。所見票はその結果を発表する場でもある。

②については、学生に対する直接回答であることを重視し、教員が自らの見解を自由に率直に表明しやすくするという趣旨で、公開は学内に限り、学生の便宜を考えて図書館に配置することにした。

③については、自由記述が単純にデータ化できないため、結果すべてを所見票に載せることはできない。また、記述内容によっては書き手が特定される場合もある。そこで、それを読んだ教員の責任でまとめてもらうことにして、教員所見にそのための欄を設けた。

④については、これを書くことでこのアンケートの目的で指摘された教員の自己研修を促すことになる。また、所見集が学内で公開されることから、学生以外にも同僚教員の目に触れる機会もあり、相互研修にもなることが期待される。

以上、所見票はこのようなことを期待して作られたのである。

(以上、2004年度報告書より転載)

#### 1-4 実施科目の選定方針

本学における「学生による授業評価アンケート」は2004年度にスタートし、2006年度までの当初3年間は「講義科目を対象に1教員1科目」の原則で実施した。これにより、教員個々人の意識が高まり、授業改善の効果が上がったことは、各項目の数値が有意に上昇したことからも明らかである。

2007年度には、スタート時に確認された目的のうち、「学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る」「大学として教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る」に比重を移し、実施対象科目に一部の演習科目を加えた上で、各学部・学科等の必要性により科目を選定する方式に切りかえた。2008年度、2009年度はこの方針を踏襲して実施した。

一方で、授業評価アンケート開始当初から、アンケートは単年度ごとにその目的と実施内容を検討・決定するのではなく、数年度単位の中期的な計画に基づいて展開する必要性が指摘されており、その策定に向けて、継続的に議論を行ってきた。

2006年度には、「1 教員 1 科目の原則による実施は、教員個々人の意識を高め、教員全員が自らの自己研修の資料を得る観点から、少なくとも数年に一度は必要である」との全学的合意がなされた（2007年1月25日、部長会）。その後、他大学の実施状況調査を行うとともに、全学教務委員会および教育改革推進会議での学部等からの意見収集ならびに協議を経て、2009年度の教育改革推進会議（2009年11月19日）において、2010年度以降の基本方針を以下のとおり決定した。

- ① 授業評価アンケートは毎年実施する。
- ② 「1 教員 1 科目」の原則による実施は、3年に一度とする。
- ③ ②以外の年度は、「学部等の必要性に応じた選定」により実施する。

基本方針決定以降の、科目選定方針は以下の通りである。2010年度は定められた基本方針に拠って、実施する初年度となり、上記②の「1 教員 1 科目」の原則により実施した。

- ・2010、2013年度：「1 教員 1 科目」
- ・2011、2012、2014、2015年度：「学部等の必要性に応じた選定」

なお、2015年度の各学部等における科目選定方針については、「2-3 各学部等の科目選定方針（p.11）」を参照されたい。

### 1-5 回答結果の全学的な活用に向けて

本学は、従来、1-1に記載した目的に沿い、学生による授業評価アンケートの集計結果を教員個人の授業改善や、学部等によるFDの基礎資料として活用してきた。しかし、回答データを計量分析し、そこから得られた知見を、全学的なFDに活用するには至っていなかった。

そこで、大学教育開発・支援センター教学IR部会では、直近において「1 教員 1 科目」を対象に実施した2013年度の回答データを用いた分析を2015年度に実施し、教育改革推進会議を通じて全学へ報告を行った。

当該分析から得られた知見とは、教員の授業に対する工夫や努力、たとえば、各回の授業内容を明確に提示するよう意識する、授業内容の量を学生のレベルにあわせて調整するなどの取り組みによって、学生の授業や学習に対する意欲は高められるということであった。詳細は、「6. 2013年度「学生による授業評価アンケート」のデータを用いた追加分析（p.63）」を参照されたい。

2017年度には、優れた教育実践を行う教員を表彰する「立教大学教育活動特別賞」の選定にあたり、上述した知見を踏まえて、2016年度授業評価アンケートの一部の項目の集計結果を用いることになっている。学生がアンケートに回答するにあたり相当な負担を被っていることを肝に命じ、今後もこれまで以上にその結果の活用に努めたい。



## 2. 授業評価アンケートの実施概要

本報告書において、「学部等」とは、各学部、全学共通カリキュラムおよび学校・社会教育講座を示す。また、学部表示は科目開設学部を示しており、回答者（学生）の所属ではない。

### 2-1 実施方式

無記名式の質問紙によるアンケート方式にて実施した。また、アンケートの実施は授業時間内（授業開始から30分間、もしくは授業終了前の30分間）において行うこととした。

### 2-2 設問項目

5段階による評価方式の設問を23設問、記述による評価欄を2箇所の構成とした（pp. 8-9 参照）。設問の中には、必ずしも全科目には該当しないと思われるような設問もあるが、実施委員会としては、各設問項目の数値は、科目の特徴に照らして各科目担当者の裁量により解釈されるものとしている。

また、学部等によって独自の設問が設定できるよう、1学部あたり最大で7設問を設定できるようにした。2015年度は、文学部（2設問）、経済学部（6設問）、理学部（4設問）、観光学部（6設問）、現代心理学部（3設問）、全学共通カリキュラム（4設問）が学部設問項目を設定した（p.10 参照）。

## 2015年度立教大学授業評価アンケート

このアンケートは、立教大学の授業を改善し、さらに充実させることを目的に行われます。調査は無記名で行われ、回答の内容が成績評価に影響することはありません。大学を構成する重要な一員である学生として、みなさん自身が大学教育をより良いものにするという意識のもとに、率直かつ責任をもって回答してください。  
立教大学

(注意) 1. マークにはHBの鉛筆を使うこと。 2. 本枠内に必要事項を記入の上マーク欄に正しくマークすること。 3. 誤りは消しゴムで完全に消すこと。  
4. 指定以外のところには書きこまないこと。 5. 折りまげたり汚したりしないこと。

指示に従って「科目コード」、「学部」、「学科」、「学年」をマークしてください。

<b>科目コード/Course No.</b>	<b>本学部生 (学部・学科は学生番号の3・4桁目のアルファベット)</b>
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)	学部 (A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)	
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)	学科 (A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (M) (N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)	
① ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	学年 ① ② ③ ④
① ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	<b>本学部生以外</b>
① ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	特別外国人学生 (Special International Students) (特)
① ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	特別聴講学生 (f-Campus、立教女学院短大など) (聴)
	上記以外 (本学大学院生、科目等履修生など) (他)

以下の項目に対して、あなたにとって5段階のどの評価であるか、〔評価欄〕にマークしてください。

5：大いにそう思う 4：そう思う 3：どちらともいえない 2：あまりそう思わない 1：そう思わない

〔評価欄〕

<b>I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。</b>	
1) 授業全体を通じての出席率 (次の中から選んでマークしてください) 5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満	⑤ ④ ③ ② ①
2) この授業に積極的に参加した	⑤ ④ ③ ② ①
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	⑤ ④ ③ ② ①
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	⑤ ④ ③ ② ①
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	⑤ ④ ③ ② ①
6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (次の中から選んでマークしてください) 平均して、1週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間	⑤ ④ ③ ② ①
<b>II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。</b>	
1) 聞きやすい話し方だった	⑤ ④ ③ ② ①
2) 各回の授業内容の量が適切だった	⑤ ④ ③ ② ①
3) 各回の授業のねらいは明確だった	⑤ ④ ③ ② ①
4) 各回の授業内容は明確だった	⑤ ④ ③ ② ①
5) 十分な静粛性が保たれた	⑤ ④ ③ ② ①
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	⑤ ④ ③ ② ①
7) 板書のしかたが適切だった	該当しない ⑤ ④ ③ ② ①
8) 映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった	該当しない ⑤ ④ ③ ② ①
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた	⑤ ④ ③ ② ①
<b>III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。</b>	
1) 自分にとって新しい考え方・発想	⑤ ④ ③ ② ①
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	⑤ ④ ③ ② ①
3) 自分で調べ、考える姿勢	⑤ ④ ③ ② ①
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	⑤ ④ ③ ② ①
<b>IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。</b>	
1) わかりやすい授業だった	⑤ ④ ③ ② ①
2) 授業全体の目標が明確だった	⑤ ④ ③ ② ①
3) 学問的興味をかきたてられた	⑤ ④ ③ ② ①
4) この授業を受けて満足した	⑤ ④ ③ ② ①

※裏面にも設問がありますので、裏面も記入してください。



## V. 学部等による設問

### 文学部

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった

### 経済学部

- 1) (全科目共通設問) 教室の規模と設備は適切であった
- 2) (基礎ゼミナール1) 経済文献を読む力がついた
- 3) (基礎ゼミナール1) レジューメやレポート作成の力がついた
- 4) (情報処理系科目※) 表計算ソフト (Excel) の応用力が身についた
- 5) (情報処理系科目※) Power Point でプレゼンテーション資料を作成する力が身についた
- 6) (情報処理系科目※) WEB 上から経済資料・統計資料を入手する力が身についた

※情報処理系科目とは、以下の科目をさす

情報処理入門、経済情報処理 A、政策情報処理 A、財務情報処理 A

### 理学部

- 1) シラバスに沿って授業が行われた
- 2) 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた
- 3) (1年次春学期必修科目のみ) 教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開をしてくれた
- 4) (必修科目のみ) 授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同士が共同して解決策をとった

### 観光学部

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった
- 3) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった
- 4) わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識した
- 5) わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた
- 6) わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた

### 現代心理学部

- 1) この授業の受講者数は適切だった
- 2) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった
- 3) 現代心理学部の教育研究設備に満足している

### 全学共通カリキュラム

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった
- 3) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった
- 4) この授業の登録方法 (次の中から選んでマークしてください)  
⑤ 1次抽選登録 ④ 2次抽選登録 ③ 科目コード登録 ② その他 ① 覚えていない

## 2-3 各学部等の科目選定方針

実施対象科目は、これまで通り、学部科目（全学共通カリキュラムおよび学校・社会教育講座を含む）のうち、専門演習、実験、集中や実技を伴う科目、全学共通カリキュラム言語科目を除外した科目とした。

2015年度は、基本方針により「学部等の必要性に応じた選定」により実施した（詳細は p.5 参照）。各学部等の選定方針は、下表の通り。

学部等	科目選定方針
文 学 部	(1) 各学科・専修の導入教育（初年次教育）科目 ①1年次必修科目 ②1年次で履修可能な科目 ③2年次必修科目 ④2年次で自動登録となる科目 (2) 文学部基幹科目 (3) 各学科・専修で必要と認める科目
経 済 学 部	(1) 「講義科目1教員1科目」の調査は実施しない (2) 本年度については原則春学期に実施する (3) 共通シラバスを用い、授業の目的及び内容にある程度の共通性があり、複数コマ開講されている科目及び積み上げ方式の1年次科目（それに直接接続する科目を含める場合もある）についてアンケートを実施する
理 学 部	(1) 数学科では新カリキュラム（2010年度より移行）の有効性を検証するために、新カリキュラムにおける新規に設計した必修科目・選択必修科目について、定観測（毎年、同じ科目で調査）を行う (2) 物理学科では原則として複数担当科目以外の全ての講義科目を選定する。経年変化を見るために、なるべく毎年同じ科目について、アンケートを実施する。ただし、講究は受講者が少ない場合が多いので、担当者の希望がある場合のみ実施することにする (3) 化学科では原則として、必修講義科目ならびに複数教員担当科目をのぞく選択講義科目の経年変化を調査するために、毎年同じ科目についてアンケートを実施する (4) 生命理学科では授業評価に対する改善策の具体的効果を継続的に検証するために、2015年度も同じ科目についてアンケートを実施する (5) 共通教育科目では独自にアンケートを行うため実施しない
社 会 学 部	(1) 必修科目はすべて実施する (2) 「講義科目」については、科目の種類を問わず、なるべく「年間1教員1科目」となるように選定作業を行う
法 学 部	(1) 3年に1回全教員（専任・兼任）について、1教員1科目を原則に行う (2) (1)を行わない年度については、本学で初めて授業を開講する教員、およびアンケートの実施を希望する科目を対象に行う ※2015年度は(2)に該当する
経 営 学 部	「演習」を除く全科目で実施する。ただし、科目特性を考慮して、独自にアンケートを実施する科目については、当該アンケートの実施対象に含めない
異文化コミュニケーション学部	必修科目の講義科目のうち学部が必要と考える、同一科目で複数コマ開講する科目および今年度新規開講科目
観 光 学 部	(1) 原則として学部方針によって選定する2年間のうちに全教員1回1科目で実施する (2) 演習、実験、実技を伴う科目は対象としない (3) 複数教員担当科目は対象としない (4) 集中講義は対象としない ※2015年度は(1)に従い、2014年度に実施していない教員のみを対象とする
コミュニティ福祉学部	(1) 1教員1科目以下の実施を原則とする (2) 資格科目を優先する (3) 演習科目は対象外とする (4) 昨年度実施科目を優先する
現 代 心 理 学 部	(1) 学部専任教員が担当する「学部共通選択科目（旧カリ「総合展開科目）」全科目 (2) 学部専任教員が担当する「初年次教育科目」 (3) 学部専任教員が担当する「講義科目」及び「共通シラバスにより展開される一部の科目」 なお、「演習科目」「実験科目」及び「複数教員担当科目」は、原則として実施対象としない
全学共通カリキュラム	本学で開講される全カリ立教A、領域別A、主題別Aの講義系科目の全科目、およびグローバル教育センター提供の総合自由科目を対象とし、担当する1教員（専任・兼任）1科目の実施とする
学校・社会教育講座	(1) 履修者5名以下が予想される科目は対象外とする (2) 教職課程は「講義科目1教員1科目」を原則として実施する (3) 他課程は、今年度、特に授業評価を要する重点的科目に限って、アンケート実施する



## 2-4 実施科目数

実施科目数は春学期 539 科目、秋学期 491 科目、合計 1,030 科目であった。

実施予定科目数は、春学期 544 科目、秋学期 508 科目、合計 1,052 科目であったので、全学の実施率（実施科目数/実施予定科目数）は 97.90%（1,030/1,052）、所見票提出率は 80.38%（828/1,030）となった。

科目開設学部等	実施 予定 科目数	実施学期内訳		実施 科目数	実施学期内訳		所見票 提出数	実施学期内訳	
		春学期	秋学期		春学期	秋学期		春学期	秋学期
文 学 部	147	75	72	144	75	69	115	59	56
経 済 学 部	67	52	15	67	52	15	61	47	14
理 学 部	94	48	46	93	48	45	84	41	43
社 会 学 部	119	56	63	116	56	60	89	41	48
法 学 部	11	5	6	8	5	3	8	5	3
経 営 学 部	100	53	47	93	50	43	59	34	25
異文化コミュニケーション学部	8	7	1	8	7	1	4	4	0
観 光 学 部	10	4	6	10	4	6	10	4	6
コミュニティ福祉学部	116	57	59	116	57	59	95	43	52
現 代 心 理 学 部	28	10	18	27	10	17	14	5	9
全学共通カリキュラム	304	147	157	301	145	156	247	124	123
学校・社会教育講座	48	30	18	47	30	17	42	28	14
合 計	1,052	544	508	1,030	539	491	828	435	393

## 2-5 実施期間

可能な限り授業が進行した時期に実施することが望ましいとの考えから、2012 年度より最終授業週も授業評価アンケートの実施期間とした。アンケートの実施は第 1 週を原則とし、最終授業週は予備週とした。

春学期：2015 年 7 月 7 日（火）～7 月 20 日（月）

秋学期：2015 年 12 月 21 日（月）、2016 年 1 月 12 日（火）～1 月 23 日（土）

## 2-6 回答者数

アンケート実施科目の延べ回答者数を、科目の開設学部等別に下表にまとめた。参考のために、履修者数も表に載せた。

科目開設学部等	春学期		秋学期		合 計	
	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数
文 学 部	5,558	3,936	4,050	2,969	9,608	6,905
経 済 学 部	1,975	1,661	1,701	1,065	3,676	2,726
理 学 部	3,563	2,378	3,056	1,754	6,619	4,132
社 会 学 部	9,016	5,027	7,922	4,408	16,938	9,435
法 学 部	1,358	773	699	326	2,057	1,099
経 営 学 部	7,389	4,124	5,863	2,804	13,252	6,928
異文化コミュニケーション学部	287	265	123	112	410	377
観 光 学 部	530	382	1,341	912	1,871	1,294
コミュニティ福祉学部	5,895	3,674	6,102	4,001	11,997	7,675
現 代 心 理 学 部	1,827	1,194	2,245	1,240	4,072	2,434
全学共通カリキュラム	21,009	12,713	20,032	12,847	41,041	25,560
学校・社会教育講座	1,753	1,381	496	397	2,249	1,778
合 計	60,160	37,508	53,630	32,835	113,790	70,343

## 2-7 「所見票」の公開

所見票（科目別の集計結果および科目担当者による所見）は、WEB上で学生・教職員（兼任講師含む）に対し閲覧に供している。加えて、「所見集」としてまとめ、池袋図書館および新座図書館においても閲覧に供している。



### 3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック

#### 3-1 科目担当者

担当科目の集計結果（下記①、②、③）をアンケート実施1~2ヶ月後に「所見票入力システム」上に掲載し、これを基に、科目担当者には所見票（p.18 参照）の執筆を依頼した。

- ①集計結果票（p.17 参照）
- ②「記述による評価」一覧票
- ③アンケート元データ

#### 3-2 学部等

以下の方針で、集計結果を提供した。

##### 1) 集計の方針

- ①学部等によって科目選定方針が異なるため、集計・分析は学部等別に行い、全学での集計や学部等間の比較、昨年度との比較は行わない。
- ②学部等が独自に設定した基準でアンケート実施科目をグループ化し、科目間の比較や全体傾向を把握するグループ集計を実施する。グループ集計の実施の有無は学部の判断に委ねる。

##### 2) 集計内容

###### ①回答者数・回答率

アンケート回答者を学部等別、学年別に集計した。また、アンケート実施科目の延べ履修者数と延べ回答者数を集計し、学部等別に回答率を算出した。（資料編 p.71 参照）

###### ②学部等別平均値

設問項目別に平均値を算出し、回答割合を帯グラフで示した。また、学科等別、授業規模別、学年別の平均値を算出した。（学部等別平均値は、資料編 pp.72-83）

なお、2013年度より、アンケート設問項目の「I1) 出席率」および「I6) 授業時以外に学習した時間」については、以下の通り数値を置き換え算出している。

###### ・ I1) 出席率

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、  
「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

###### ・ I6) 授業時以外に学習した時間

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、  
「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

### ③設問項目間の相関

相関係数を学部等別、学科等別に算出した。学部等別の相関においては、IV総合評価、特にIV4「この授業を受けて満足した」を中心に、他の設問項目との関連をみた。

### ④グループ集計（実施学部のみ）

アンケート実施科目を学部等の指定によりグループ化し、設問ごとに回答割合を帯グラフで示した。また、設問項目別平均値をレーダーチャートと一覧表で示した。

（pp.19-20 参照）

学部等には、上記「2）集計内容」と、科目担当者が執筆した所見票を送付し、学部等総評の執筆を依頼した。

## 2015年度春学期 立教大学授業評価アンケート 集計結果票

科目コード	JHK02	開講曜日	土	担当者	立教 太郎	履修者数	60
科目名	授業評価02	開講時限	4	教室	N212	回答数	59

単純集計結果 (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない)

5	4	3	2	1	無回答*	エラー	平均
回答者数、( )内はパーセント							1から5の数字の平均

\*0-7, 8は「該当しない」もぎむ

### I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満)	32 (54%)	23 (39%)	4 (7%)	0 (0%)	0 (0%)	0	0	89.49	+1
2) この授業に積極的に参加した	14 (24%)	15 (25%)	25 (42%)	3 (5%)	2 (3%)	0	0	3.61	
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2 (4%)	5 (9%)	27 (48%)	10 (18%)	12 (21%)	3	0	2.55	
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2 (3%)	5 (8%)	25 (42%)	17 (29%)	10 (17%)	0	0	2.53	
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	21 (36%)	19 (33%)	14 (24%)	0 (0%)	4 (7%)	1	0	3.91	
6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (平均して、1週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間)	2 (3%)	0 (0%)	2 (3%)	16 (27%)	39 (66%)	0	0	0.31	+2

### II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) 聞きやすい話し方だった	11 (19%)	29 (49%)	12 (20%)	3 (5%)	4 (7%)	0	0	3.68	
2) 各回の授業内容の量が適切だった	14 (24%)	26 (44%)	10 (17%)	6 (10%)	3 (5%)	0	0	3.71	
3) 各回の授業のねらいは明確だった	22 (37%)	30 (51%)	7 (12%)	0 (0%)	0 (0%)	0	0	4.25	
4) 各回の授業内容は明確だった	28 (47%)	25 (42%)	6 (10%)	0 (0%)	0 (0%)	0	0	4.37	
5) 十分な静肅性が保たれた	45 (79%)	12 (21%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0	2	4.79	
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	40 (68%)	9 (15%)	10 (17%)	0 (0%)	0 (0%)	0	0	4.51	
7) 板書のしかたが適切だった	13 (29%)	4 (9%)	25 (56%)	1 (2%)	2 (4%)	7	6	3.56	
8) 映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった	28 (60%)	13 (28%)	6 (13%)	0 (0%)	0 (0%)	8	4	4.47	
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた	45 (76%)	10 (17%)	4 (7%)	0 (0%)	0 (0%)	0	0	4.69	

### III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。

1) 自分にとって新しい考え方・発想	24 (42%)	27 (47%)	2 (4%)	2 (4%)	2 (4%)	0	2	4.21	
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	28 (47%)	22 (37%)	2 (3%)	7 (12%)	0 (0%)	0	0	4.20	
3) 自分で調べ、考える姿勢	4 (7%)	9 (15%)	28 (47%)	13 (22%)	5 (8%)	0	0	2.90	
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	32 (55%)	9 (16%)	12 (21%)	2 (3%)	3 (5%)	0	1	4.12	

### IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) わかりやすい授業だった	24 (41%)	25 (42%)	5 (8%)	5 (8%)	0 (0%)	0	0	4.15	
2) 授業全体の目標が明確だった	27 (46%)	22 (37%)	10 (17%)	0 (0%)	0 (0%)	0	0	4.29	
3) 学問的興味をかきたてられた	20 (34%)	21 (36%)	13 (22%)	2 (3%)	3 (5%)	0	0	3.90	
4) この授業を受けて満足した	20 (34%)	26 (44%)	8 (14%)	4 (7%)	1 (2%)	0	0	4.02	

# 2015年度春学期 立教大学「学生による授業評価アンケート」所見票

科目コード JHK02 科目名 授業評価0.2 開講曜日 土 開講時間 4 担当者 立教 太郎 教室 N212 履修者数 60 回答数 59

単純集計結果 (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない)

5	4	3	2	1	無回答*	エラー
1	1	1	1	1	1	1

\*1-7, 8は「該当しない」を含む

## I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上 4:70~89% 3:50~69% 2:30~49% 1:30%未満)
- 2) この授業に積極的に参加した
- 3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた
- 4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした
- 5) シラバス(履修要項の授業内容)は要領に役立った
- 6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間)

## II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) 聞きやすい話し方だった
- 2) 各回の授業内容の量が適切だった
- 3) 各回の授業のねらいは明確だった
- 4) 各回の授業内容は明確だった
- 5) 十分な特異性が保たれた
- 6) 教科書・授業レジюмеプリントや参考文献が効果的だった
- 7) 板書のしかたが適切だった
- 8) 映像授業教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった
- 9) 教員は授業の準備を周到に行っていた

## III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。

- 1) 自分にとって新しい考え方や発想
- 2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識
- 3) 自分で調べ、考える姿勢
- 4) 授業で扱った内容が得つ、現代に通じる普遍的な意味

## IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) わかりやすい授業だった
- 2) 授業全体の目標が明確だった
- 3) 学問的興味をかきたてられた
- 4) この授業を受けて満足した

## V. 学部等による質問(金カリ)

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった
- 3) この授業が行われた教室の環境や設備は十分だった
- 4) この授業の登録方法 (5:1次抽選登録 4:2次抽選登録 3:科目コード登録 2:その他 1:覚えていない)

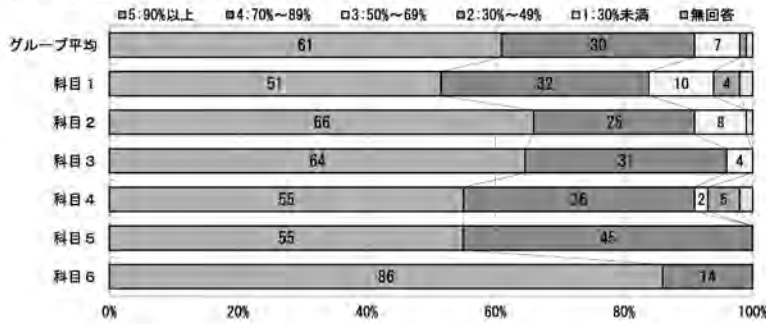
## 授業評価に対する担当教員の所見

## 記述による評価に対する担当教員の所見

## 改善に向けた今後の方針

1) 設問別帯グラフ ( 5:大いにそう思う 4:そう思う 3:どちらともいえない 2:あまりそう思わない 1:そう思わない 9:該当しない(Ⅱ-7,Ⅱ-8のみ) 無回答 )

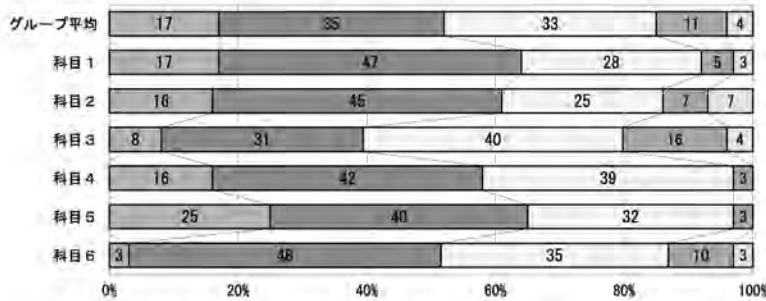
I-1 授業全体を通じての出席率



	回答者数*	平均 <sup>2</sup>	無回答
グループ平均	113	94.87	-
科目1	19	96.90	-
科目2	15	96.00	-
科目3	20	95.67	-
科目4	21	97.87	-
科目5	18	86.89	-
科目6	20	92.22	-

\*1「無回答」は除く  
\*2 I-1の平均値の算出方法は表紙に記載

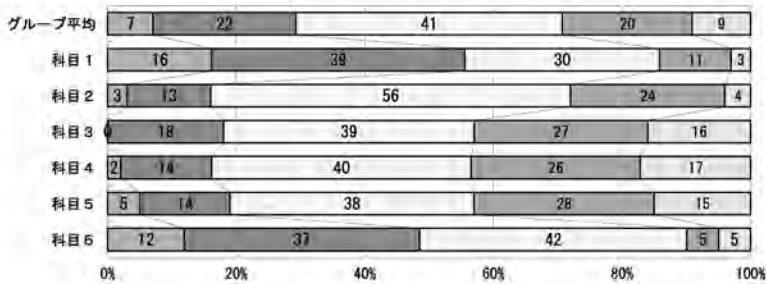
I-2 この授業に積極的に参加した



	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	3.61	-
科目1	18	3.72	-
科目2	15	3.69	-
科目3	20	3.20	-
科目4	21	3.78	-
科目5	18	3.90	-
科目6	20	3.46	-

\*「無回答」は除く

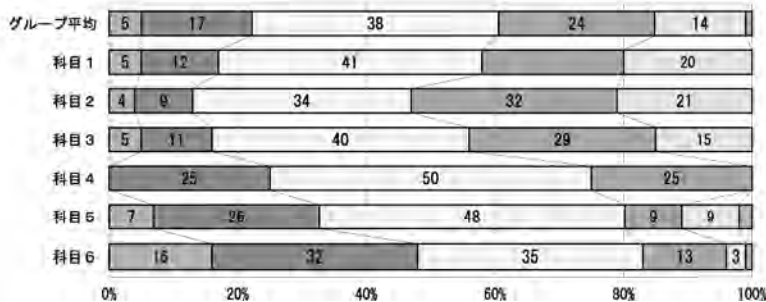
I-3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた



	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	3.01	-
科目1	19	3.58	-
科目2	15	2.76	-
科目3	20	2.65	-
科目4	21	2.63	-
科目5	18	2.93	-
科目6	20	3.67	-

\*「無回答」は除く

I-4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした



	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	2.98	2
科目1	19	2.60	-
科目2	15	2.42	-
科目3	20	2.67	-
科目4	21	3.09	-
科目5	18	3.12	1
科目6	20	3.56	1

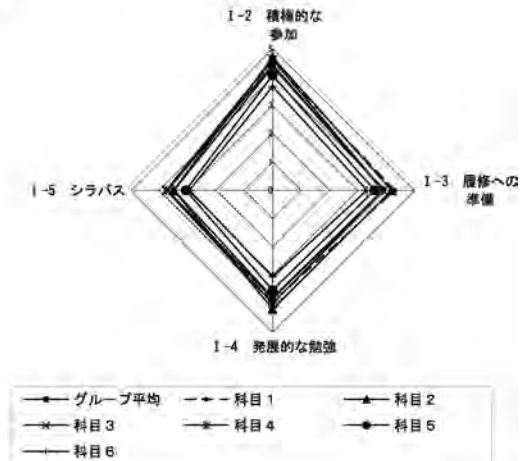
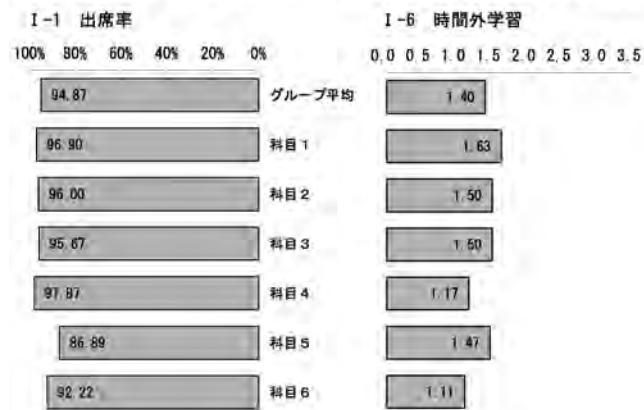
\*「無回答」は除く



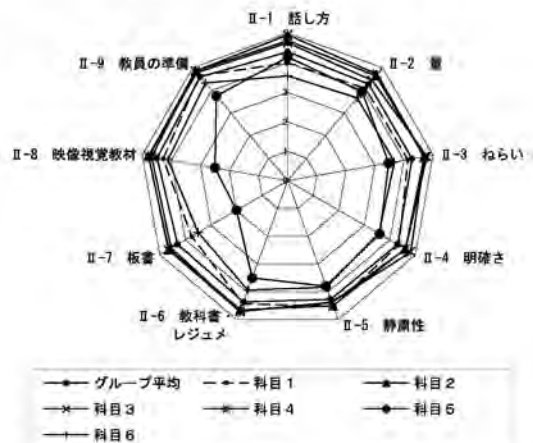
## 2) 平均値のレーダーチャート

(5:大いにそう思う 4:そう思う 3:どちらともいえない 2:あまりそう思わない 1:そう思わない)

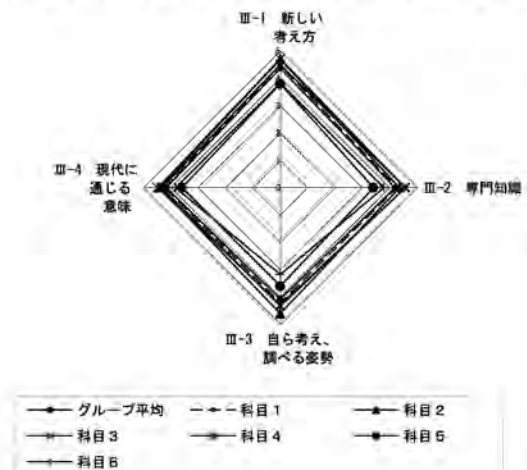
I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



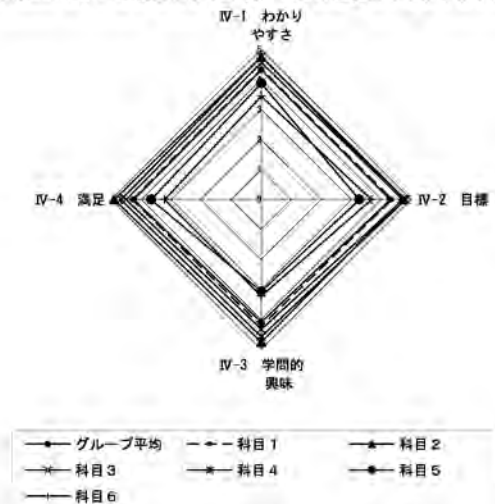
II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。



IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。



## 4. 学部等総評

学部等総評は、科目ごとの集計結果、各教員の執筆した所見票および学部全体の集計結果をもとに、下記を基本形として、各学部等が執筆した。

<構成の基本形>

1. 科目選定方針とねらい
2. 集計データにみられる結果のまとめ
3. 担当教員の所見票に対するまとめ（「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ、「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ、「改善に向けた今後の方針」のまとめ）
4. 学生からの意見（記述による評価）の集約（「肯定的評価として多い意見の集約」、「否定的評価として多い意見の集約」）
5. 今後の改善に向けて

2013年度より「I1) 出席率」および「I6) 授業時以外に学習した時間」については平均値の集計結果方法を変更した（P.15 参照）。このため、「I1) 出席率」および「I6) 授業時以外に学習した時間」については、2012年度以前の報告書および2013年度の他の項目と数値の意味が異なる。

## 4-1 文学部

### 1. 科目選定方針とねらい

2015年度については、導入ならびに基礎科目を中心として調査を行う方針を立て、以下の科目を選定した。

(1) 各学科・専修の導入教育（初年次教育）科目

- ①1年次必修科目
- ②1年次で履修可能な科目
- ③2年次必修科目
- ④2年次で自動登録となる科目

(2) 文学部基幹科目

(3) 各学科・専修で必要と認める科目

なお、学部による設問項目については、前年度を踏襲した。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

アンケート科目は合計144（春学期75、秋学期69）にのぼった。調査対象の科目総履修者数は9,608名であり、そのうち6,905名が調査に回答した。文学部生の回答率は71.87%。これは全学平均回答率の平均61.82%よりもかなり高く、全10学部中で3番目に高い回答率で、文学部生の授業の行われ方に対する一般的関心の高さを反映している。アンケートに回答した文学部生の学年別分布は、1年次2,537名、2年次2,208名、3年次1,428名、4年次574名、不明158名。学年による回答者数の差違は、学部による科目選定方針（1年次および2年次向けの科目を中心とした）に起因すると見られる。

I「授業への取り組み方」について。平均92.51を示しているI1「出席率」は、14年度と同設問の平均92.62とほぼ同等である。これは学部の科目選定方針に従って1～2年次の必修科目・自動登録科目が多く含まれていることを反映していると判断される。一方、I2「授業への積極的な参加」では4.04、14年度より微増の数値が出ているが、I6「当該授業に関し授業以外に学習した時間」が14年度1.04に対し、15年度は1.02と微減であった。授業外の学習時間は横ばいであり、回答割合から読みとると、もっとも多いのは昨年度同様「1時間未満」という回答である。しかし、授業規模別平均値をみると、50名以下のクラスでは、授業外の学習時間は、1.57時間、51～100名では0.89時間、101～150名で0.73時間、151名以上で0.77時間となっている。すなわち、クラスが50名を超えると授業外学習時間は大幅に減少してしまう。このことは、基礎系科目・入門演習のような50名以下と、大きな教室での講義形式の授業の間のギャップを示している。また、I3「履修への準備」は平均3.45、I4「発展的な勉強」は平均3.38であったが、どちらの設問についても回答のうちもっとも多かったのは、3「どちらともいえない」である。授業規模別にみると、50名以下ではI3とI4とも3.79、51～100名では3.33（I3）、3.27（I4）であり、授業外学習時間ほどの減少は見られない。以上のことから、50名以下の小規模である基礎系科目・入門演習では、学生は講義にはよく出席し、それなりに予習復習をしていると思われる。しかし、発展的な勉強について授業規模との関係があまり見られないということは、小規模の授業に関して、特に数値を上げる余地がまだあると言えそうだ。I5「シラバスの有用度」に関しては13年度が3.73、14年度3.60、15年度3.63と推移している。シラバス作成方

法の変更は、14年度に大きく変更されたが目立った効果は見られない。

続いてⅡ「授業の進め方」について。昨年度同様、いずれの設問においてもおおむね高い評価が与えられている。Ⅱ1からⅡ9の各問のうち、Ⅱ7「板書の仕方」については平均値が3.70でやや低いが、残りのすべての項目で4点台を出している。Ⅱ7の回答者が4,395名であるのに対し、Ⅱ8「映像視覚教材の使用の効果」の回答者は4,753名で14年度の4,464名よりも増えている。Ⅱ8の平均値は4.24でⅡの設問中2番目に高い評価であった。以上のことから推測すると、教員側は映像視覚教材の使用が増え、板書の使用が減少しているかもしれないし、学生は板書やプリントなどの資料より、パワーポイントやビデオによる教材提示を好むようになってきているのかもしれない。こうした現実を踏まえて、今後の授業評価方法として、板書を含めた「視覚的教材の提示一般の効用」を問うようなものに設問を変更すべき時期に来ているのではないだろうか。しかし他方で、海外の学会ではパワーポイントの問題点（説明が箇条書き的に短くなりすぎる、話が速くなりすぎる、図表ばかりになる、話に集中しづらい、討論がしにくい等）から、パワーポイント離れが起き始めており、古典的な発表スタイルの復活も見られる。今後の授業でも古典的な方法の復活が生じるかもしれない。Ⅱ5「授業の静粛性」は、予想される通りに、受講人数が多いほど点数が低くなり、50名以下では4.50であったのが、151名以上では、3.63まで落ちる。これは対処に一考の余地があるだろう。Ⅱ9の「教員は授業の準備を周到に行っていた」は4.35で、かなり高い評価だと言えよう。この数値は、授業規模が151名以上であっても4.27であり、それほど低下していない。教員の授業準備は全般に十分なレベルにあると考えられる。

Ⅲ「授業から得たもの」について。Ⅲ1「自分にとっての新しい考え方・発想」とⅢ2「基本的な専門知識」は4点程度となっており、ある程度よい。しかし、Ⅲ3「自分で調べ考える姿勢」の3.69は、14年度よりもやや向上したものの、期待通りではない。Ⅲ3「自分で調べ考える姿勢」は、文学部では大いに推進してゆきたい学生の資質のひとつであり、さらなる向上を目指したい項目である。これについて、授業規模別の数値を参照してみると、50名以下のクラスでのⅢ3「自分で調べ考える姿勢」は4.23であり、51～100名になると3.59と急落し、151名以上では3.39となる。したがって、このⅢ3「自分で調べ考える姿勢」の低さは、中大規模授業において授業外の学習時間がきわめて少ないことと関連している。そこで、中大規模授業での授業外学習時間を増やし、予習復習を行わせるような授業運営にすることが大事であろう。そのためには、教育指導が行えるTAを増員し、授業外学習を促進し、それを指導し評価する人員を増やす必要があると思われる。また、Ⅲ4「現代に通じる普遍的な意味」も、3.85はやや物足りない。この数値は授業規模50名以下で3.91、151名以上で3.80と大きな数値の差はみられない。したがって、教員が、自分の行っている授業が、現代社会においてどういう位置付けを持ち、どのような普遍的な意味をもつのかを十分に意識して講義を組み立て、それを学生に説明していく必要があるだろう。

Ⅳ「授業の総合的評価」については、Ⅳ1からⅣ4までいずれの設問についても比較的高い評価がなされている。Ⅳ1「わかりやすさ」、Ⅳ2「目標の明確さ」、Ⅳ4「満足度」はいずれも4点台と高いが、Ⅳ3「学問的興味がかきたてられた」が、3.98にとどまっている。この項目は授業規模が大きくなるとやや数値が低下する。したがって、教員と学生間のインタラクションの少ない授業では、学生の学問への動機づけが難しいことに注意しなければならない。

なお、文学部による設問に関しては、昨年度同様、教室の大きさも受講者数もほぼ適切だったという回答が得られている。

### 3. 担当教員の所見票に対するまとめ

多くの教員が、学生からの評価結果を真面目に受け取っており、自分の努力と評価された点の一致不一致を自覚しながら、所見票をまとめている。学生から高評価を与えられなかった項目については反省と改善の方法を記述してある所見が数多く見られた。語学系の基礎演習と入門演習のような導入教育系科目、大人数の教養系科目では、教員が注意している点が異なるが、演習系科目で共通して意識されている改善点として、学生個人に対してどのようにフィードバックを行うか、教員と学生間の質疑応答のようなインタラクションをどのように増やすか、討論や発表などの学生間のインタラクションをどのように充実させるか、事前事後の学習をどのように増やすかという点が挙げられる。しかしながら、改善に向けてそれほど具体的な提案が示されているわけではない。授業の分かりやすさや資料提示の仕方、難易度に関してはかなり具体的な反省や改善法が書かれているのに対して、学生の「自分で調べ考える姿勢」や「発展的な勉強」を促すための方法については具体性に欠けている。これは、大学側が、自主性を促進できる授業方法についての講演やワークショップをさらに実施する必要を示唆しているかもしれない。また少なからぬ教員から私語の問題が指摘されている。とくに受講者の多い科目でこの問題が顕著になる。全学的な取り組みがなされるべきである。

### 4. 今後の改善に向けて

2015年度は、前年度と比して、教員の反省点や改善点が、いわゆる「アクティブ・ラーニング」を志向するものになっている。学生の総合評価との関連の強いものは、「授業の分かりやすさ」「授業目標の明確さ」「聞きやすい話し方」「授業のねらいの明確さ」「授業内容の明確さ」であり、満足度は、「授業への取り組み方」「授業の進め方」「授業から得たもの」に関連する。他方、「出席率」「授業時間以外の学習時間」は授業の満足度と関連が弱い。これは、学生の意識がまだ中等教育までの受け身の姿勢にとどまっていることを示している。これは、このアンケートが低学年対象であることも反映していると推測されるが、他方で、所見票からわかるように、教員側も、授業時間外に学生に十分な準備をさせて、授業時間では、教員と学生、学生同士のインタラクションを通じて教育するという方法論がうまく確立できていないことを示しているように思われる。個々の教員は、さまざまな方法を用いて、自分の講義を分かりやすく伝え、理解させる努力を行っているが、自分の授業がどのように今後の学生の学びの文脈につながっているかをもっと理解させる必要があり、授業内容もそうした自己の研究と教育を囲む現代社会の大枠についてさらに伝える努力が必要とされるだろう。また教員は、学生にもっと自主的に学習に取り組むことを期待し、もっとインタラクティブな講義を志向しているが、まだその具体策については模索中であるように解釈される。この改善にはTAなどの活用も重要である。

他方で、私語に対する態度、遅刻や欠席の扱い、スマートフォンや携帯など通信機器の授業内使用の禁止、授業外の学習時間の確保など、全学的な方針を定め、すべての学生に遵守するように求める必要がある項目も存在する。特に、私語や遅刻、スマートフォン利用などはこれを許容する雰囲気学内にあれば、各教員の注意では止めることが難しいと言えるだろう。

## 4-2 経済学部

### 1. 科目選定方針とねらい

2015年度は昨年度と同様以下のような方針で科目を選定した。

- (1) 「講義科目1 教員1科目」のアンケートは実施しない。
- (2) アンケートは原則春学期に実施する。
- (3) 共通シラバスを用い、授業の目的及び内容にある程度の共通性があり、複数コマ開講されている科目及び積み上げ方式の1年次科目について、アンケートを実施する。

2015年度は、共通シラバスを用い、授業の目的及び内容に共通性がある1年次用の基幹科目について、アンケートを実施した。学生側からの授業評価を通じて、経済学部が提供する1年次用の基幹科目の内容の適切さや課題を、学部全体として評価するのが大きなねらいである。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

2015年度のアンケートは、実施予定科目数67科目、実施科目数67科目となった。回答者は延べ2,726名であり、履修者数と比した回答率は74.16%となり、全学平均の61.82%より大幅に高く、昨年度と同様、異文化コミュニケーション学部、学校・社会教育講座に次いで高いものとなった。この要因としては、今年度の実施対象科目が1年次の必修科目あるいは自動登録科目が中心であり、学生の講義への出席率が相対的に高いということが挙げられよう。

項目別平均値に関しては、全体としては、3点台後半から4点台の良好な数値が得られているものの、「I この授業へのあなたの取り組み方・・・」の中の、「I4 授業をきっかけに発展的な勉強をした」「I5 シラバスは受講に役に立った」が3点台前半にとどまっている。これは昨年度も同様であった。

前者の発展的な勉強の項目に関しては、今回アンケートを行った科目が1年次向けの基幹科目が中心であることを考えると、これらの科目の受講をきっかけに発展的な勉強に繋がっていないことは懸念される場所である。またこの傾向は、「I5 この授業に関連して授業時以外に学習した時間」の低さにも現れている。

他方、後者のシラバスの項目に関しては、本年度実施したアンケートのほとんどが必修あるいは自動登録科目であったため、学生には授業の選択に関してシラバスを参考にすることがなかった（無意味であった）ことが大きな要因であると思われる。

また学年別平均値に関しては特に大きな傾向は見られない。授業規模別平均値に関しては、昨年度は授業規模が小さいほど平均値が高い傾向が見られるが、今年度はそのような傾向は見られなくなっている。ただ、今年度は100名を超える授業規模の大きい科目が3科目にとどまっているため、ここから少人数教育の有効性に関して結論を出すのは困難であるように思われる。

### 3. グループ集計にみられる結果

#### 3-1 グループ集計の分類

今回、グループ集計では、基本的に同一科目をグループ化したが、「経済情報処理・政策情報処理・財務情報処理」に関しては、各学科別の情報処理科目であり、内容が類似していると考えられることから、同一グループとした。また1年次の「基礎ゼミナール1」に関しては、さらに担当者（助教・兼任・専任）別にグループ化した。

### 3-2 グループ集計にみられる結果の概要

今回は3-1のグループ化の方針に沿って、9のグループを集計した。本年度は比較的授業規模が小さい科目に限定されていたこともあり、アンケート結果は総じて良好である。また担当者間における大きなばらつきも特に見られない。その中で特に目立った問題点と、それに対して推測される要因を指摘しておく。

まず、「情報処理入門」に関しては、静粛性の評価に比較的大きなばらつきがあり、一部の教員が静粛性の管理を適切に行えていないことが予想される。「経済情報処理・政策情報処理・財務情報処理」に関しては、昨年度は静粛性に関する平均値が低い傾向が見られたが、今年度はそのような傾向は見られず改善されたものと思われる。また、「基礎ゼミナール1」に関しては、助教の担当しているグループ5や教授の担当しているグループ7と比べ、兼任講師の担当しているグループ6では、評価のばらつきが非常に大きいことが分かる。この原因に関して、担当者会議や兼任講師懇談会などの機会を通じてさらなる調査が必要であるように思われる。

### 4. 担当教員の所見票に対するまとめ

アンケートを実施した67科目の授業のうち、所見票が提出されたのは61科目であった。なお、提出されていない6科目の担当者のうち、専任が2名、兼任講師が1名であった。所見票の全員提出に向けて、より徹底した注意喚起やアナウンスを行うこととしたい。

所見票への記述量については教員により大幅な差異が見受けられるものの、内容的には、板書や視覚教材の見やすさ、静粛性の確保、話し方、進行のスピード等について改善を求める学生からの指摘に関して、多くの教員が次年度に向けての改善の努力をする姿勢を示している。

また、「I4 授業をきっかけに発展的な勉強をした」の平均点の低さと「I6 授業時以外に学習した時間」の少なさを懸念するコメントが共通して多くなされ、それへの工夫が必要であることが多くの教員に認識されている。ただ、これは昨年度も同様であり、この問題に対する対処の難しさを示している。

### 5. 学生からの意見（記述による評価）の集約

#### 5-1 肯定的評価として多い意見の集約

肯定的評価に関する記述は多様性に富んでいるが、昨年度と同様、教員の説明や配布教材がよい、という意見は多く見受けられた。なお、授業の難易度や進行速度については、しばしば同一の科目内で肯定的なものや否定的なものが混在しているのも同様である。

#### 5-2 否定的評価として多い意見の集約

否定的評価としては、これも昨年度と同様、板書や話し方、授業準備（CHORUS等に教材をアップする手順等も含む）に関するものが多い。また情報処理系の科目で静粛性が保たれていないことを指摘するものが多かったが、これは集計結果の分析から容易に想像できることである。

## 6. 今後の改善にむけて

4. で述べたように、「I4 授業きっかけに発展的な勉強をした」と「I6 授業時以外に学習した時間」におけるパフォーマンスの低さは例年の問題であり、経済学部としての有効な対策が打ち出せていないのが現状である。この点に関して、パフォーマンスが良好な学部の取り組み等があれば、ぜひ学部間で共有化してもらい、参考にさせていただきたいと考えている。情報処理系の授業における私語の多さについては、担当教員と連携を図りながら、学期始めに行われている担当者打ち合わせ会議などで問題を提起し、解決策を探る努力をしていきたい。



## 4-3 理学部

### 1. 科目選定方針とねらい

2015年度は、「学部等の必要性に応じて選定」という全学的方針を守りながら、例年通り科目の選定を行った。これまで理学部では各学科とも、経年変化を調査するために、毎年なるべく同じ科目を選定する方針で行ってきた。2015年度についても昨年度同様、数学科は2010年度より実施の新カリキュラムで新たに設けた必修科目・選択科目を、物理学科は原則として複数担当科目を除くすべての講義科目を、化学科は必修講義科目と複数担当科目を除く選択講義科目を、生命理学科は原則として複数担当科目を除くすべての講義科目から教員一名あたり複数科目にならないように科目を選定した。共通教育科目については、独自にアンケートを行うこともあり、例年通り非実施であった。また、理学部独自の設問についても、前年度を踏襲した。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

理学部の回答率は62.43%であり、全学平均(61.82%)より高かったものの、昨年度の65.14%を下回った。学年ごとの回答者数は、1年生1,116名、2年生1,517名、3年生1,142名、4年生293名であり、昨年度と比べると、4年生の回答者数が増加し、1・2・3年生の回答者数が減少した。

学生の授業への取り組み方についての集計結果を昨年度と比べると、「(I1) 授業全体を通しての出席率」が微減、「(I2) 授業に積極的に参加した」が横ばいである以外は、他の(I3)(I4)(I5)(I6)については増加している。その中で、「(I3) 十分な準備ができていた」や「(I4) 授業をきっかけに発展的な勉強をした」に、「大いにそう思う・そう思う」と回答した学生については、昨年度より微増の48%前後になった。また、「(I6) 授業時以外に学習した時間」に関しては「3時間以上」と回答した学生の割合は8.0%、「1時間未満・0時間」と回答した学生は約48%であり、昨年度に比べて若干改善したことが見て取れる。しかし、同時に、依然として授業に出るだけで自ら学ぶことのない学生が大勢いることもうかがえる。

2014年度の(I)～(IV)の項目の集計データと比較すると、上述したように、(I1)(I2)以外はすべての設問でポイントが上昇した。「(V) 学部等による設問」についても(V4)が横ばいである以外は(V1)(V2)(V3)についてもポイントが上昇している。

この現象が2015年度だけの例外的なものであるか、今後の経過を注視する必要がある。

学年別の比較では、昨年度とは異なり、「(I1) 出席率」と「(I2) 積極的に参加」において2年生のポイントが最も高く、それを除くと、1年、3年、4年になるにつれて(I1)と(I2)のポイントがともに低下している。一方で、「(I3) 十分な準備ができていた」や「(I4) 授業をきっかけに発展的な勉強をした」については3年生のポイントが最も高かった。また、「(II) 授業の進め方」の項目では、ほとんどすべての設問において年次が上がるにつれてポイントが高くなる傾向がある。「(III) この授業から得ることができたもの」と「(IV) 総合的に見て、この授業は」の項目では、3年生と4年生のポイントが高い。

この現象が理学部固有の傾向なのか、他学部との比較が出来れば有益かも知れない。

学科別のデータに関しては、ほとんどの設問に関して生命理学科のポイントが高いことは特筆に値する。

### 3. 担当教員の所見票に対するまとめ

#### 3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

肯定的評価を受けていると所見を述べている教員が多く見受けられたが、同時に相変わらず授業外の自主的な学習が少ないことへの懸念が多い。また、静粛性の維持などで大きなストレスを感じている教員も少なくないことがうかがえる。

#### 3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

昨年度同様、「説明が丁寧」「板書が早い」、「板書がきれい」「字が小さい」、「内容が難しい」「物足りない」などの相反する評価について苦慮する所見が多い。「学問の性格上これ以上レベルは下げられない」という所見もあり、教員の苦悩がうかがわれる。具体的な対策としては、配布資料の工夫や板書の改善に関する記述が多く見受けられた。

#### 3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

授業内容の精選、レジュメや授業ノートの配布資料の工夫、映写・動画資料の効果的利用、板書の改善、小テストの実施、課題の提示、CHORUSの活用などさまざまな改善策が述べられている。同時に、学生への過度のサービスは、かえって学生の自発的学習の妨げになるという指摘もあり、難しい問題である。

### 4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

#### 4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

肯定的評価としては、説明が丁寧・わかりやすい、教員やTAが質問に丁寧に答えてくれる、板書が丁寧・きれい・大きく見やすい、パワーポイントの利用、プリントやレジュメが分かり易い、理解を深めるための演習や小テスト・課題・宿題がある、授業で取り上げるトピックが興味を引く内容である、静粛性が高い、などが主なものであった。

#### 4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

否定的評価としては、授業内容が難しい・わかりづらい・易しすぎる、内容量が多い、進み方が速い、板書が速い・字が小さい・読みにくい、声が小さい、マイクの雑音、教科書を読み上げるだけ、課題が多すぎる、演習と講義の連携がよくない、教室環境がよくない、教科書がわかりづらい、レポートが多い、教科書に沿って欲しい、私語が多い、演習が少ない、などが主なものであった。

### 5. 今後の改善に向けて

学部全体としては、2014年度の授業評価アンケート結果で大きくポイントが減少した項目「(V3) (1年次春学期必修科目のみ) 教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開してくれた」について、2015年度は3.65ポイントで、0.13ポイント上昇し、ある程度改善された。これは、各教員の地道な努力によるものであると推測される。しかし、このポイント自身は他の設問のポイントと比べると有意に低いと思われる数字であり、今後も引き続き改善策を模索する努力を続けたい。

## 4-4 社会学部

### 1. 科目選定方針とねらい

2012年度導入の現行カリキュラム下の、学部としての授業評価アンケート対象科目選定方針は以下の通りであり、2015年度は、前年を踏襲した従来通りの選定を行った。

- ①必修科目はすべて実施する
- ②講義科目については、科目の種類を問わず、なるべく「年間1教員1科目」となるように選定作業を行う

2012年度カリキュラムでは、従来学科別に行われていた初年次、2年次の必修科目を学部共通の必修科目と位置づけ、これまで以上に学部として基礎教育の充実を目指すことになった。そのため、これらの科目に対する学生の評価は、今後の基礎教育のさらなる充実に向け重要である。①については、2011年度までは「必修・選択必修の講義科目は、原則としてすべて実施する」というやや緩やかな方針をとっていたが、基礎教育を重視するカリキュラム改訂の実施を踏まえて、2012年度からは必修科目は全て実施するという変更をおこなった。

②は基本的には2007年度以降の選定方針を踏襲するものである。

### 2. 集計データにみられる結果

#### 2-1 授業規模別

50名以下の授業が、「Ⅱ1 聞きやすい話し方だった」以外のⅡ、Ⅲ、Ⅳのすべての設問において51名以上よりも高いか同じ数字となった。特に「Ⅱ5 十分な静粛性が保たれた」では、4.51、4.07、3.72、3.43と授業規模が大きくなるにつれ、評価が下がっている。統計的優位差は不明であるが、少人数規模の方が教員による授業の進め方が適切であり、授業の静粛性が保たれているなど（設問Ⅱ）、履修者が授業に取り組める環境が整っており、その結果、授業から得るものが多く（設問Ⅲ）、総合的に見て授業に対する評価が高かった（設問Ⅳ）のではないかと考えることができる。

しかし、履修者の授業への主体的取り組みに関する設問Ⅰについては、50名以下が比較的高かったが、いずれの規模においても、「Ⅰ3 授業の履修にあたって十分な準備ができていた」では3.24、3.24、3.19、3.25、「Ⅰ4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした」では、3.25、3.16、2.99、3.04のように高くはなかった。

また「Ⅱ7 板書の仕方が適切だった」においても、規模が大きくなるにつれて評価が低くなっているが、これは大教室の講義になればなるほどパワーポイントなどの視聴覚教材で説明を行う比重が高くなり、板書は学生からは見えにくくあまり積極的には行わない可能性がある、などの事情を斟酌すべきだろう。

#### 2-2 学年別

昨年度までと同様、授業出席率は学年が進むにつれて低下しているが、その他のほぼ全ての設問について学年が進むにつれて数字が高くなる傾向が見られる。Ⅱ「この授業の進め方は」、Ⅲ「この授業から得ることができたもの」、Ⅳ「総合的にみて、この授業は」の

すべての設問で、学年が上がるにつれて数字が高くなる傾向が見られる。学年による数字の変化が大きいものは、「Ⅱ5 十分な静肅性が保たれた」の1年 3.49 に対して4年 4.01、「Ⅲ4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味」の1年 3.57 に対して4年 4.12、「Ⅳ4 この授業を受けて満足した」の1年 3.67 に対し4年 4.16 である。

### 2-3 学科別

昨年度同様、全体としてメディア社会学科科目の数字が高い。今年度は、社会学科科目、共通科目が相対的に低めの数字となっている。Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの設問で4.00を超えているのは、メディア社会学科科目が14、現代文化学科科目が6、社会学科科目は1、共通科目は2である。

### 3. 担当教員の所見票に対するまとめ

出席点の有無にかかわらず出席率が高いとの記述が多くみられた。また、授業の進め方に対する改善を講じているとの記述も多くみられた。一方で、教室での静肅性の保持についての記述も例年のように少なからずみられた。大規模授業の担当教員を中心に改善を図る旨のコメントが多く書かれているが、改善の難しさも指摘されている。

授業評価アンケートの実施に伴う授業の中断（履修者からの否定的意見もあり）や同一科目について毎年度実施することによる授業へのしわ寄せについての疑問や戸惑いが複数の教員から寄せられている。パワーポイントなどの視聴覚教材の工夫については一定の評価が得られており、さらなる工夫を行う、などの記述が多かった。

### 4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

否定的評価：履修者の多い授業で「静肅性が保たれない」ことに対するコメントが多く見られる。

肯定的評価：ゲストスピーカーの活用についての肯定的評価が多かった。

### 5. 今後の改善に向けて

改善すべき点は、例年のように、私語問題、教室の静肅性保持の改善のための大規模授業の減少に努めることである。2014年度から一部の大規模授業で他学部履修者の人数制限を行い、一定の効果があったと考えられるが、制限していない科目では依然として履修者が非常に多い科目が存在している。このため他学部履修者の人数制限を引き続き検討するとともに、開講曜日・時限などの熟慮を呼びかける。

2012年度カリキュラム改訂で導入した社会学原論、社会調査法、基礎演習などでは担当者会議を設置して、授業の運営や内容について日常的に検討する体制をとっているが、今後も継続的に授業運営および内容の改善に取り組んでいく。

## 4-5 法学部

### 1. 科目選定方針とねらい

法学部では、2011年度より、全教員（専任・兼任）について授業評価アンケートを行うのは3年に1回とし、それ以外の年度は、本学で初めて授業を開講する教員および実施を希望する科目を対象にアンケートを行うことにした。2015年度は、本学で初めて授業を開講する教員および実施を希望する科目を対象にアンケートを実施する年度に該当するため、教員の希望を調査した上で、合計8科目につき授業評価アンケートを行った。なお、毎年度の全教員についての授業評価アンケートの実施をとりやめたのは、授業評価アンケートも回を重ねるにつれて、アンケート結果に対して授業改善に取り組むという姿勢が浸透しており、3年に1回のアンケートで、学生からの意見のフィードバックとしては十分であると考えられるためである。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

回答率は、53.43パーセントであり、全体の回答率61.82パーセントと比較して低い。これは、アンケート対象となっている講義科目では、出席が成績評価に反映されない場合が多いことから、授業の出席率が低くなっていることが原因であると考えられる。

設問項目別平均値においては、前年度に引き続き、Ⅱ9「教員は授業の準備を周到に行っていた」（3.88）が、比較的高い値を示している。また、Ⅱ2「各回の授業内容の量が適切だった」（3.79）、Ⅱ3「各回の授業のねらいは明確だった」（3.76）、Ⅱ4「各回の授業内容は明確だった」（3.81）、Ⅳ2「授業全体の目標が明確だった」（3.74）も、同様に高い値であった。講義科目を対象としたアンケートにおいて、授業を通じて講師が学生に提供しようとした狙いが明確に伝わっていることがうかがえ、また、授業の準備が評価されていることは、教員の努力や工夫の成果と評価できよう。他方で例年と同様、Ⅰ3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」（3.01）、Ⅰ4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」（2.78）の値が低くなっている。さらにⅠ6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」（0.82）は昨年度（0.92）よりも低い値となっている。学生の受動的な学習態度がうかがわれる状況に大きな変化がなく、主体的な学習を促す取り組みが要請される状況は変わっていないようである。

授業規模別平均値であるが、今年度は、8科目と対象科目が少なく、授業の規模と授業評価の関係を総じて論じることは難しい。51～100名の科目と151名以上の科目を比べれば、授業の規模が大きくなるにしたがって平均値が下がる傾向を見いだせるが、そもそも51～100名の科目が2科目にとどまるため、この2科目の特性が強く出ている可能性があることが指摘されている。したがって、法学部全体において、授業規模と授業評価の関係がどのような傾向にあるのかを判断するには、より継続的な観察が必要である。

学年別平均値によれば、1年生が、他の学年と比較して、多くの設問項目において低い値を付けていることが分かる。主たる原因としては、大学における履修・講義のスタイルへの適応が不十分であることが挙げられよう。特に、Ⅱ1「聞きやすい話し方だった」、Ⅱ5「十分な静粛性が保たれた」における差が顕著であることは、とくに大教室において、教員の視線（監視）を意識しにくい状況下で静粛さを保つことが1年生にとって容易でないことを感じさせる。

また、多くの設問項目において、2年生が3.4年生よりもかなり高い値を付けていること

が注目される。2年生が大学に慣れ、学習に集中できることは理解でき、また望ましいことでもあるが、より大学に慣れているはずの3年生が2年生より低い値を示す原因としては、就職活動、とりわけインターンシップの活発化等の影響もあるのかもしれない。4年生における平均値が3年生に比べて持ち直すのは、就職活動が一定程度落ち着いたことから、再び大学での学習に集中できる環境が取り戻せたのではないかと考えられる。

設問項目間の相関においては、授業の満足度（IV4「この授業を受けて満足した」）が、授業の分かりやすさ（IV1「わかりやすい授業だった」）、授業目標の明確さ（IV2「授業全体の目標が明確だった」）とも強い相関を示している。こうした授業の分かりやすさよりも、強い相関を示したものとして学問的刺激的の程度（IV3「学問的興味をかきたてられた」）が挙げられている。わかりやすだけでなく、興味をかきたてる内容の授業が求められていることがうかがわれる。ただ、残念ながら、授業の満足度（IV4）と出席率（I1）や授業時間以外の学習時間（I6）との関連は弱く、評価の高い授業が、学生の学習態度を積極的なものへと転換させる動機付けとしての機能を果たしているわけではない可能性もある。

### 3. 担当教員の所見票に対するまとめ

#### 3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」まとめ

多くの教員が、学生の率直な評価を真摯に受け止め、相対的にであれ評価の低い項目があった場合については、その原因を検討したうえで、次年度以降に改善を試みる姿勢を明らかにしている。

#### 3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」まとめ

多くの教員が、学生からの肯定的評価を今後の授業の励みとし、批判的な評価や要望に対して真摯な回答を寄せている。

学生の関心を引きつけ集中力を維持するいくつかの試み（映像資料の活用、感想レポート、パワーポイントの使用など）に関しては、概ね学生から好評が寄せられているようであり、教員としても一定の手応えを感じているようである。

他方、授業で使用されるレジュメ等参考資料、パワーポイント、板書の分量・形式・内容などについて、なお様々な要望が寄せられている。本年度は本学で初めて授業を開講する教員による科目が主として対象になっていることから、これらについては、教員の側でも試行錯誤の状況にあることがうかがわれるコメントが寄せられている。

他に、授業の静粛性に関して、適切な教室サイズの配当を大学側に求めるコメントも見受けられた。

#### 3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

多くの教員がアンケートの結果を踏まえて授業改善に向けた検討を行っている。内容は各教員が認識した課題に応じて様々であるが、一般的なブラッシュ・アップに加えて、①レジュメや板書の内容・形式の改善、②パワーポイントや映像資料の活用、③授業時間外の自習を促す（手助けする）取り組みの模索（ポータルサイトを用いた予習復習の課題指示等）、④私語等への対処方法の改善等が挙げられる。なお、授業外学習を促す取り組みについて、兼任講師に対して、学部の方針を示してほしいという意見もあった。

#### 4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

##### 4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

肯定的評価の記述としては、授業内容、レジュメ等につき分かりやすさに関するものが目立つほか、マイクを回して質疑応答を行うという双方向型の取り組みにも肯定的評価が集まっていたものと思われる。またある授業では、冒頭に時事問題と授業内容との関連につきコメントするという試みが多くの学生の理解の助けとなっていたようである。

##### 4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

否定的評価の記述としては、板書・レジュメ等について、より詳細さ・分かりやすさを求めるものが目立つよう見受けられた。また、授業中の静粛性に関する苦情のほか、授業が延長することに関する不満、教室の大きさ（特にタッカーホールでの授業）、冷暖房についても一部で示されている。

#### 5. 今後の改善に向けて

立教で初めて授業を担当された教員による科目が主たる対象となった本年度のアンケートと教員の所見票からは、授業評価アンケートが、とくに立教の学生と直接コミュニケーションをとる経験の少ない教員にとって、学生からの率直なフィードバックに基づいて授業内容をブラッシュ・アップする有益な機会であることが改めて感じられた。

サンプル数の限られた本アンケートではあったが、全体の傾向は例年と同様であったことが確認できる。すなわち、全体としては授業内容につき一定の評価がされているものと思われるが、学生に主体的・積極的な学習を動機づけることについては課題が残るという状況である。前年度、当欄において、主体的・積極的な学習を動機づけるための方策に対する教員間での情報共有を課題として示した。そこで、「基礎文献講読」の担当者会議を通じて、学生の動機づけに成果を挙げていると思われる取り組み（ベストプラクティス）について具体的に情報共有を行うとともに、兼任講師との打ち合わせの機会も積極的に活用し、これらを教授会にて報告・情報共有を行った。眼で見える形で改善を示すことは必ずしも容易ではないが、来年度以降も、本総評を教授会メンバーで共有し、ベストプラクティスの収集および情報共有を継続し、学生の主体的・積極的な学習を動機づけられる授業の実現にむけて努めたい。

## 4-6 経営学部

### 1. 科目選定方針とねらい

経営学部は、2～4 年次演習および BLP・BBL 関連科目を除いて、原則として、全科目を対象に、春学期 50 科目、秋学期 43 科目の合計 93 科目で授業評価アンケートを実施した。全科目を指定している理由は、「学生による授業評価アンケート」の結果は授業を担当する教員に対して重要なフィードバック効果をもたらし、授業の質を高めるのに寄与するものと考えているからである。なお、BLP および BBL 関連科目について実施しない理由は、これらの科目が演習系の科目であり、科目の独自性も強いので、大学所定のアンケートでは十分に実態を把握できないからである。学部でも独自に詳細なアンケートを実施していることから、これらの科目を除くことにした。

### 2. 集計データに見られる結果のまとめ

学生側の授業に対する取り組みを示す6項目については、「授業全体を通じての出席率（I1）」の平均は91.65、「この授業に積極的に参加した（I2）」は3.93とそれぞれ高い数値を示し、積極的に授業に取り組んでいたことがうかがえる。ただし、アンケート実施科目の回答率（回答者数/履修者数）が52.28%であることを考慮すれば、積極的に参加する学生とそうでない学生に差がある可能性が懸念される。

一方、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた（I3）」（3.52）、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした（I4）」（3.43）、「シラバスは受講に役立った（I5）」（3.54）は、今年度も若干低くなっている。なお昨年度と同様、シラバスの記述については定型化されており、字数にも限りがあるが、その範囲内で、学習計画等に役立つ内容にしていくよう引き続き努力が必要となる。特に問題となるのは、「授業時以外に学習した時間（I6）」が1.14であり、授業への積極的な参加は見られるものの、予習・復習などへの意識は必ずしも高いとは言えない結果であった。課題の出し方などの工夫が継続して必要である。

授業の進め方については、「板書の仕方が適切だった（II7）」の平均3.77が最低であり、他のすべての項目は3.9以上という高得点であった。板書については、「該当しない」という回答が5割程度にのぼり、演習系が多い経営学部の授業形態の特徴を反映していると考えられるが、より高評価を目指すには教員側の工夫も必要であろう。一方で学生の中にもノートを取り方が不得手で、プリントやレジュメの配布を当然と考えるものが増えてきていることとも関係があると推測できる。授業の進め方については、全体として学生から一定の評価を得ているといえよう。「教員は授業の準備を周到に行っていた（II9）」については、4.26という一番高い評価を得ている。学部として、現状に満足せず、今後も努力していく必要がある。

授業から得られたものを示す4項目については、いずれも3.66以上であった。中でも、「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識（III2）」が最も高く4.00で、「自分で調べ、考える姿勢（III3）」が最も低く3.66であった。「自分で調べ、考える姿勢」については、数値自体は低くはないが、学年別に見ると、学年が上がるにつれ、その数値も上がっている（1年3.41、2年3.66、3年3.72、4年3.89）、低学年ではまだ自学自習が十分ではないためではないかと推測できる。全体としてこの項目を高める工夫に加え、特に低学年への



自学自習を促す工夫が必要であると考え。

総合的評価の4項目では、最も低い評価でも「学問的興味をかきたてられた(IV3)」が3.90と高い得点で、「この授業を受けて満足した(IV4)」も3.97と高得点であった。その意味では学生の満足度は全体的にみて、ある程度は満たすことができていると評価できる。ただ学年別にみると、満足度(IV4)は学年が下がるほどに数値も下がり、1年は3.83と最も低かった。決して低い評価ではないが、低学年の学生についての対応が必要と考えられる。

### 3. 担当教員の所見票に対するまとめ

「授業評価に対する担当教員の所見」については、総合評価が比較的高かったことに言及する回答が多くみられた。ただ、授業の予習や復習、授業外学習時間、発展的学習について十分な評価が得られていないとの所見もあり、主体的な学習を今後促すような言及もみられた。また私語に対して言及している所見もみられ、教員からの注意の必要性とともに、学生自身の自覚の必要性にも言及がなされている。

「記述による評価に対する担当教員の所見」については、学生の肯定的評価として、私語への厳しい対応やリアクションペーパーへの対応など学生の意見を取り込んだ点が挙げられ、その効果の確認がなされていた。また、「分かりやすい説明」、「興味深かった」などの学生の意見に対して、授業の継続的な向上を目指す意見もみられた。他方、否定的評価として、教室の後方までマイクの音量が届いていないことやパワーポイントの進むペースが速いことに対して配慮する言及がみられた。

「改善に向けた今後の方針」については、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした(I4)」の得点の低さについて多く言及されており、改善に向けた工夫の必要性が認識されていることがわかる。また、授業進行(パワーポイントのスライド操作等)のスピードが速いことに対して、情報量を減らすなどの改善策の意見が出されているが、内容が薄くなることに対する懸念も述べられている。教室の静粛性については、履修者人数の多さに比例すると言及されており、今後の課題であるという意見があった。英語で実施される授業については、外国人留学生と日本人学生間に英語レベルの差が見られることもあり、事前に教務課より履修学生数(留学生と日本人学生の比率など)を教員に伝えることや、同等の英語レベルの学生で履修を制限した方が、より良い授業になるという指摘もあった。

### 4. 学生からの意見(記述による評価)の集約

学生の「肯定的評価として多い意見」については、教員のスキルとして丁寧な説明、わかりやすい説明、わかりやすいスライドやレジュメ・プリントの作成、授業の仕方として映像資料の活用、リアクションペーパーに対するフィードバック、一生懸命さ、理解できない点への対応、発言する機会、グループワーク、最近のニュース・話題、具体例の活用、図やグラフを使った説明、定期的な小テストによる授業内容の確認、授業の環境として私語が少ない静粛性があげられている。またレジュメ・スライドを印刷した資料の配布やゲストスピーカーの起用に対しても肯定的評価が多い。

また学生の「否定的評価として多い意見」について、スライドの形式に関する意見が多く見られた。例えば、スライドの文字が小さい、ノートがとりにくいパワーポイントだ、内容が分かりづらいなどの指摘があった。さらにスライドを配布してほしいといった資料

の配布を希望する学生が見られる。また、スライドを配布しなかったため写真を撮る学生が多く、その音がうるさいなどの指摘もあった。板書に関連するものに関しては、パワーポイントの切り替えが速い、書く時間がない、先生の話聞いてノートを書くのは間に合わないなどという意見が多い。また授業中の私語については、私語が多すぎる、私語の対策を講じてほしい、注意の時間が多すぎるという指摘があった。そのほか、教員のスキルとして聞きづらい、話し方が面白くない、声が小さいといった指摘、また授業の内容としてポイントが明確でない、リアクションペーパーのフィードバックをしない、授業スピードが速い、グループワークで学生のモチベーションに差があるなどが挙げられている。

## 5. 今後の改善に向けて

総合的評価をみると比較的高い評価を得ているといえるが、しかし学生側の授業に対する取り組みを示す6項目のうち、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた（I3）」、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした（I4）」、「シラバスは受講に役立った（I5）」が相対的に低く、「授業時以外に学習した時間（I6）」も決して高い値になってはいない。また授業から得られたものを示す4項目のうち「自分で調べ、考える姿勢（III3）」も相対的に低い。これらの値より、授業には参加するがそれ以外の時間では学問から離れてしまっている様子がうかがえる。この点については、それぞれの講義の形式があり、全ての授業で一様に方法を論じることは難しいが、課題や宿題を与えることや事前にテキストを読ませるなどして講義への準備を促す工夫が必要であろう。また、教員側の工夫だけではなく、学生自身の主体的な学習姿勢にも期待したい。パワーポイントの活用やレジュメ・スライドを印刷した資料の配布は学習にとって効果的であるが、適度な分量、見やすさへの配慮、適度な進度が必要と考えられる。しかし講義を聴講しながらノートを取る能力は学生にとって必要な能力でもあるので、その点を自覚し取り組むように促したい。映像資料の利用は学生の学習にとって効果的であると考えられるが、理解した気になりやすいので、定着のためには文字による理解や十分な理論的説明とバランスをとることに留意する必要がある。最後に2015年度のアンケート結果は2014年度の値よりさほど変化していないことが挙げられる。高水準の教育ができている反面、さらに改善が必要な面もあるので、来年度は数値として成果が表れることを期待したい。

## 4-7 異文化コミュニケーション学部

### 1. 科目選定方針とねらい

異文化コミュニケーション学部では2015年度のFD目標として、(1)学部のさらなる国際化、(2)多様な留学生の受け入れに伴う基礎演習科目の展開方法についての検討、(3)学部キャリア教育の充実の3点を掲げた。このうち、前年(2014年度)に引き続き、留学準備において重要な意味を持ち、学部の国際化のポイントになる Cultural Exchange の春学期6科目、留学を4年間の学びの中にどう位置づけるかだけでなく、その後の社会生活にまでつなげることを目指す College Life Planning (CLP) の春・秋学期1科目ずつの2科目、合計8科目について、授業評価アンケートを実施した。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

8科目のアンケート結果のうち、6科目はグループ集計が行われているため、ここでは全体の結果を見ることにする。実施状況としては、全体の回答率91.95%で、履修者の大部分からの回答を得ることができた。

授業への取り組み(設問項目Ⅰ群)については、学部平均値で、「授業への出席率」(Ⅰ1)は97.02%、「積極的に参加した」(Ⅰ2)は4.22で、学生たちが積極的に授業に参加していたことが確認できる。「履修にあたっての十分な準備」(Ⅰ3)は3.92、「授業をきっかけに発展的勉強をした」(Ⅰ4)は3.64で、平均的な結果である。「シラバスが役立った」(Ⅰ5)の結果は3.51で、それほど高くない。理由としては、共通シラバスの内容がいくぶん抽象的に書かれているからではないかと思われる。「授業時以外に学習した時間」(Ⅰ6)は1.45で、堅実な水準にある。

つづいて、授業の進め方(設問項目Ⅱ群)については、「映像視覚教材の使用が効果的だった(Ⅱ8)」が4.43、「教員が授業の準備を周到に行っていた」(Ⅱ9)が4.60と、高評価を得ている。学生の記述による評価の中にも、教員の熱意に対する肯定的な評価が複数見られた。「板書のしかたが適切だった(Ⅱ7)」の結果は、4.10であった。データから顕著なのは、「該当しない」をマークした学生が多かったことである。クラスごとにばらつきがあるものの、その数は3~5割になり、多いクラスでは7割にのぼっている。こうした傾向は、授業で板書がなされないことに関わるものと思われる。今後、板書に関する項目が必要なのかどうかを検討する必要があるだろう。

授業から得ることができたもの(設問項目Ⅲ群)については、学生からの評価は総じて高い。学生の感想に散見されるように、留学について知識を得ることができたという満足感が、「自分にとって新しい考え方・発想」(Ⅲ1)の4.27という結果につながったように思われる。ただし、Cultural Exchange は、留学の準備もちろん含むが、それだけでなく、異文化をいかに理解し、それに適応するのかを学ぶための授業でもあり、この科目が学部のカリキュラムの中で持つ意味を、担当教員が学生たちに十分に伝える努力をすることは大切なことであろう。一方、「現代に通じる普遍的な意味」(Ⅲ4)の4.00や「専門知識」(Ⅲ2)の4.01という結果は、平均的なレベルにある。

総合的評価に関する項目(設問項目Ⅳ群)については、Cultural Exchange と CLP が、留学という目標を前にした準備のための授業としても位置づけられているため、「わかりやすい授業」(Ⅳ1)が4.30、「授業全体の目標が明確だった」(Ⅳ2)が4.29、「満足した」(Ⅳ

4) が 4.11 と高くなっている。それに対して、「学問的興味をかきたてられた」(IV3) は 3.90 と、やや低かった。この結果から分かるのは、学生にとって、留学のための準備は、あくまでも「学問的興味」には結びついていないということである。この点は、今後、カリキュラム設計などに生かすべきだろう。

### 3. 担当教員の所見票に対するまとめ

#### 3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

8名の担当者のうち所見票が回収されたのが4名のみ（Cultural Exchange 3名、CLP1名）だったため、精確なまとめにはならないが、学生からの肯定的な評価に対して、担当教員はおおむね満足感を表明している。教員は、留学生と日本人の学生と一緒に学習することは効果的で、学生は毎週しっかり取り組んだと評価しており、それに対し教員自身も教える喜びを感じた、など総じて前向きな所見がみられた。

#### 3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

Cultural Exchange について、学生たちはよく動機づけられており、宿題もなんとかこなしたことに對して肯定的な評価が与えられている。日本語話者の教員からは、学生の中の英語能力に格差があるが、そのことがマイナスになるのではなく、どの学生も能動的に取り組めるクラス環境づくりを目指すべきだという指摘がある。この点は、Cultural Exchange の全体のクラスで共有されることが望まれる。CLP では、英文レポートを難しく感じた学生が、宿題量が多いと記述したのではないかとということが予想されている。また、英語を用いる授業について行けない学生には、ステップアップするための試練だと考えてもらいたいという所見が述べられている。

#### 3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

Cultural Exchange では、学生の間で、英語の能力に差があるので、能力の低い学生に對して、週ごとに昼休みを利用して準備のためのクラスを開催していたことが、日本語を母語とする教員から報告されており、2016年度にも、継続して取り組んでいくことが表明されている。Cultural Exchange は、共通シラバスによる授業なので、基礎学習における留学生へのフォローアップのように、こうした取り組みが全体として必要かどうか、今後、検討されるべきであろう。

CLP については、将来的に、各々の学生が目標を見いだすことができる授業にし、宿題をより良いものにし、パワーポイントもまた活用すべきだというアイデアが提示されている。

### 4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

#### 4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

留学する上で役に立ったという意見が多かった。また、留学生と同じ授業を受けてディスカッションでき、意見交換できたことを肯定的に評価している学生も多かった。

#### 4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

宿題の分量が多く、大変だったという意見が多かった。ディスカッションの機会が多く大変だったが、他方で、積極的に意見を言う姿勢に気づいたということ述べている学生もおり、そのことから学生の意欲も垣間見られる。一方で、すべて英語で行うことによって、クラスについて行くことができないと表明した学生もいる。実際に、学生個々の英語能力に格差があり、一言もしゃべらない学生もいるという報告もあれば、英語能力が低い学生にも積極的に参加できる雰囲気が必要ではないかという意見、レベル別でクラス分けをしてほしいという意見などがあった。

#### 5. 今後の改善に向けて

昨年度に引き続き、学生たちの授業への評価は総じて高いように思われる。しかし、4-2にあるように否定的な意見も見られた。アンケート結果を踏まえて、複数の教員が、宿題をより良いものにしながら、教育効果の向上に取り組んでいくべきであろうと指摘している。学部としても、こうした学生側からの改善要求を受けとめて、カリキュラム設計の際、留学準備に関わる必修科目をどのように充実したものにしていかが、今後の課題のひとつであろう。

## 4-8 観光学部

### 1. 科目選定の方針とねらい

次のような方針で授業評価アンケートの実施科目を設定した。

- (1) 原則として学部方針によって選定する2年間のうちに全教員1回1科目で実施する。
- (2) 演習、実験、実技を伴う科目は対象としない。
- (3) 複数教員担当科目は対象としない。
- (4) 集中講義は対象としない。

※2015年度は(1)に従い、2014年度に実施していない教員のみを対象とする。

### 2. 集計データに見られる結果のまとめ

2015年度は上記※の理由により実施科目数が10科目(回答者数1,294名)と少なく(2014年度は実施科目数86科目、回答者数7,250名)、集計データには実施科目の特性が強く表れていることに留意する必要がある。たとえば、実施10科目のうち5科目が履修者数100名超の大人数科目となっており、履修者数上位3科目の回答者数だけで全体の約56%を占めていることが挙げられる。

集計データによる結果は、2014年度の傾向と似通ったものである。

授業の進め方に関する設問Ⅱ1～Ⅱ8(「該当しない」が60%に達する設問Ⅱ7を除く)に対して約66%～75%が「大いにそう思う」または「そう思う」と回答、なかでも設問Ⅱ9「教員は授業の準備を周到に行っていた」に対しては、約80%が「大いにそう思う」または「そう思う」と回答している。さらに、総合的な評価に関する設問Ⅳ1～Ⅳ4に対して約62%～68%が「大いにそう思う」または「そう思う」と回答している。これらの結果から、学生が授業の進め方に関して高く評価しており、授業に概ね満足していることが読み取れる。

一方、授業への取り組み方に関する設問Ⅰのうち、設問Ⅰ3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」と設問Ⅰ4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」に対して、「大いにそう思う」または「そう思う」と回答した学生は、いずれも30%台にとどまっている。このことは、設問Ⅰ6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」については、「0時間」または「1時間未満」と回答した学生が70%を上回っていることの反映であり、学生自身がこのことを自覚している様子が読み取れる。学生が授業時以外の学習時間を持たない、または確保できなくなっていることは、設問Ⅲ3「自分で考え調べる姿勢」に対して「大いにそう思う」または「そう思う」と回答した学生が45%を下回っている結果にも表れている。設問Ⅰ1「授業全体を通じての出席率」で、全体の約70%の学生が「90%以上」、約25%の学生が「70-89%」の出席率と回答していることから、まじめに授業に出席して専ら教室で学ぼうとする真摯な姿勢は見取れるものの、65%以上の学生が「大いにそう思う」または「そう思う」と回答している設問Ⅲ1「自分にとって新しい考え方・発想」ならびに設問Ⅲ2「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」を深めることができない状況が改めて提示されている。

### 3. 担当教員の所見票に対するまとめ

#### 3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

設問Ⅰ3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」、設問Ⅰ4「授業をきっか

けに発展的な勉強をした」、設問 I 6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」が概ね低調であることを受けた所見が見受けられた。これらの課題は、上述のとおり全体に横たわる傾向ではあるものの、個々の授業から取り組むべき課題であるということもできる。兼任講師の所見には学部の講義体系に関する理解が不十分なまま講義に臨んでしまったことに触れているものがあった。これについては、委嘱に当たって科目の枠組み・位置づけ等の説明が不足していたことを学部の反省点として、「連絡担当教員」の役割を再確認しておきたい。

### 3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

記述による評価への記載は分散的・個別的であったが、授業によっては受講生の大半が記述による評価を詳しく記載している例があり、このような授業では担当教員の所見も詳細であった。レジュメ配付の要望が多く寄せられていることに対して、手で書いて覚える効果を重視したいとの所見が示されていることなど、授業方法の意図を明示することも所見の効果といえる。いずれにしても、授業評価が、授業の質を保証することに一定の効果を発揮していることは所見から確認でき、記述による適切な評価は教員の励ましとなっている。

### 3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

授業評価と記述による評価をもとに、きめ細やかな対応を促される授業環境にあることが読み取れる。「わかりやすさ」を追求する学生の姿勢にどこまで応じるべきかという問題とともに、記述による評価においては正反対の意見・要望があることから、授業の枠組み・位置づけ、配当年次、教室サイズ等に応じて、授業方法を柔軟に組み立てることもまた求められるようである。

## 4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

### 4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

昨年度と同様、肯定的評価とされる記述の多くに「…わかりやすかった」、「…面白かった」、「…楽しかった」等の表現が頻出することは、学生が教室での授業に求める満足度と、教員が授業を通して学生に伝えようとしていることとの間に、意識のズレがある印象である。授業時以外の学習時間がほとんど確保できない学生の状況において、「わかりやすい」という意見を肯定的評価と捉えるべきかどうかについては依然として議論の余地がある。

### 4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

これも昨年度と同様、否定的評価とされる記述の多くは、内容・表現に稚拙なものが多く見受けられるとともに、教室で担当教員に直接申し出ることによって、容易に改善または解決できる性質のものである（たとえば「声が聞き取りにくい」、「レジュメの綴じ方」、「パワーポイントのスピードが速い」など）。一方、教室の静粛性が保たれていない場合には、不規則な私語は周囲の学生の学習の権利を奪う行為であることを、教員が厳しく警告する必要がある。

## 5. 今後の改善に向けて

一昨年度の本欄では、「何よりも予習や事前準備を十分にした上で疑問や知識を持って受講すれば、理解力が高まることを学生自身に気づかせる工夫を検討しなくてはならない」と指摘、昨年度の本欄では「授業時間以外の学習時間を確保できるような意識と生活を身につけるよう誘導する」ため、「教えすぎない」「疑問を残す」など、時にはよい意味で「わかりにくい」テーマを取り入れる工夫について述べている。近年の学生の気質とともに、学生を取り巻く社会状況の変化を考慮したとしても、授業に出席し、卒業に必要な単位を取得することのみでは、大学が伝えようとする学術研究の豊かさや深さを充分獲得できないことを、自習時間を含む単位制度の考え方とともに、繰り返し学生に伝えていく必要がある。



## 4-9 コミュニティ福祉学部

### 1. 科目選定方針とねらい

2015年度の科目選定の基準は、教員自身の選定を最重視しつつ、2014年度の評価を踏まえ以下の通りとした。(1) 1教員1科目以下の実施を原則とする、(2) 資格科目を優先する、(3) 演習科目は対象外とする、(4) 昨年度実施科目を優先する。この結果、延べ116科目においてアンケート調査が実施された。

### 2. 集計データに見られる結果のまとめ

#### 2-1 全体集計にみられる結果

アンケート全体をみると、ほぼ全ての項目で比較的高い数値を示している。「授業全体を通じての出席率」(I1)で全体平均90.68%と高い水準となっている(2014年度90.06%)。各教員からも出席状況が良好であることが報告されており、講義を受講するという学生の基本的姿勢は醸成されていることが窺われる。また、「わかりやすい授業だった」(IV1)は平均値4.04、「この授業に満足した」(IV4)も平均値4.02と授業に対する理解や満足度も高かった。しかし、授業への学生の取り組みでは「この授業にあたって十分な準備ができていた」(I3)は平均値3.41、「この授業をきっかけにして発展的な勉強をした」(I4)は平均値3.29、授業から得たものとして「自分で調べ、考える姿勢」(III3)は平均値3.61と相対的に低く、しっかりと受講して、授業内容も理解しているが、自分から学び、考えるという主体的側面での積極性の涵養が課題と考えられる。なお、出席状況であるが、これを授業規模別で比較すると、「101~150名」91.99%、「151名以上」91.32%、「51~100名」90.73%、「50名以下」88.35%と大人数授業の方が少人数授業よりも出席状況が良好という結果となっているが、これは大人数授業の多くが必修科目や資格科目であり、TA・SAやハンディ・ターミナルを使った出席管理が徹底しているために、学生が前提条件として義務的に出席していると考えられる。一方で、少人数授業はそうした出席管理の束縛が軽いと学生が意識しているのではないかと推測される。こうしたことも、出席状況は良いが「学びの積極性」がやや希薄なことの背景にあると考えられる。やはり、学生の主体的な学びの姿勢をどう育むかが今後取り組むべき課題となるだろう。

次に「II授業の進め方」において、昨年度から改善したものとして、「聞きやすい話し方だった」(II1)2014年度4.08→2015年度4.09、「各回の授業のねらいは明確だった」(II3)4.08→4.09、「各回の授業内容は明確だった」(II4)4.09→4.11、「十分な静粛性が保たれた」(II5)3.99→4.02、「板書のしかたが適切であった」(II7)3.67→3.70、「教員は授業の準備を周到に行っていた」(II9)4.28→4.29があげられる。授業のねらいや授業内容の明確化は各教員の研究努力によるところが大きい。

なお、授業の静粛性維持については、2015年度のFDで授業中の私語への対策を学部として積極的に取り組み、それぞれの授業で様々な創意工夫がなされた成果と考えられる。学生の授業中の私語に対し、学部教員が揃って問題意識を持って取り組んだことで全体として成果を上げることができた。

しかし、「板書の仕方」(II7)は改善したとはいえ、やや低い評価(3.70)であるためさらなる改善が必要だと考えられる。

「IIIこの授業から得ることができたもの」、「IV総合的に見て、この授業は…」では、

わずかであるが、すべての調査項目で昨年度の数値から改善を図ることができた。これは前述の「Ⅱ 授業の進め方」について、多くの項目が改善したと連動していると考えられる。

## 2-2 学科等別集計にみられる結果

3 学科（福祉学科・コミュニティ政策学科・スポーツウェルネス学科）に関して学科別の設問項目別平均値をみると、学科により大きく数値が変わる項目は特にみられなかった。相関係数表をみても学科間で大きな傾向の違いはみられなかったが、数値上特徴がみられる点を以下に挙げる。

福祉学科については、「各回の授業のねらいは明確だった」（Ⅱ3）と「各回の授業内容は明確だった」（Ⅱ4）が総合的評価についての「授業全体の目標が明確だった」（Ⅳ2）と強い相関関係がみられ、さらには「この授業を受けて満足した」（Ⅳ4）についても他の設問Ⅱの項目に比べ比較的強い相関がみられる。

コミュニティ政策学科は、福祉学科と同様に（Ⅱ3）、（Ⅱ4）と（Ⅳ2）に強い相関関係が、（Ⅳ4）との間にも比較的強い相関関係がみられた。さらに「わかりやすい授業だった」（Ⅳ1）についても強い相関がみられたところが福祉学科と異なる点である。

スポーツウェルネス学科については総合評価（Ⅳ）については群を抜いて高い相関がみられる項目はなかったが、他学科とⅡとⅣの関係は同様に比較的強い相関がみられた。また、学科の特性からも明らかなように他学科と比べてみると静肅性との相関はとても弱い。

専門関連科目に着目すると、「授業履修のために準備した」（Ⅰ3）と「授業をきっかけに発展的な勉強をした」（Ⅰ4）に高い相関性が見られることが特徴的である。これは学生が自分の問題意識をより専門的に高めたいという姿勢があるからであろう。

## 3. グループ集計にみられる結果

### 3-1 グループ集計の分類

①学部共通科目、②学科専門科目、③専門関連科目にて、全 10 グループを設定した。

受講者 1 名から約 200 名まで様々な授業を取り上げて、比較した。全体的な傾向は 2-1 で述べたものとはほぼ共通していた。それぞれのグループに着目すると、各グループ内の科目間の差違は大きく、グループ固有の特性は見られなかった。

## 4. 担当教員の所見票に対するまとめ

### 4-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

総合評価（Ⅳ）の結果を受け、「概ね妥当な評価である」とする記述が多かった。教員の多くからは高い出席率と静かな（熱心な）聴講態度を評価する声が多かった。その一方で、「授業の準備」（Ⅰ3）や「自分で調べ、考える姿勢」（Ⅲ3）が相対的に低い数値であることを指摘する教員も少なくない。ある教員は「授業を行ったそれぞれのテーマ等について毎回参考文献や追加資料等を紹介したにも関わらず、59%の受講生が授業時以外の学習が一時間未満であったことには驚いた」と指摘している。

#### 4-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

多くの教員が指摘していることは、一方的な「知識伝授型」の授業ではなく、学生と教員の双方向での「課題探求協働型」の授業を指向したいということであった。そしてこの実現のために様々な創意工夫をされている（試みようとしている）ことが述べられていた。

学生から、抜本的な改善を求めるような否定的意見はほとんどなかったことから、多くの教員は、これまでの授業の進め方を見直しながら改善すると記載している。

#### 4-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

全般的には、①より理解しやすい授業を目指す、②学生にとって新たな知的発見につながるようにする、③学生が主体的に学ぶようにする、ということを目指した、教授法のさらなる改善を図ろうというものが多い。そのため、今現実社会で起きている問題や事象を積極的に持ち込み、身近で今日的な内容としたり、パワーポイントによる授業の交通整理、画像資料の使用（バリアフリーに考慮しつつ）、アンケートで評価の低かった板書法の工夫をめぐる所見が多かった。ついで双方向性、それも教員と学生間における双方向性だけでなく、学生同士のディスカッションを組み入れるという改善策を挙げる所見もあった。

### 5. 学生からの意見（記述による評価）の集約

#### 5-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

学生から特に高く評価されていたのは、ゲストスピーカーにより現場の実際について「生の声」が聞けることであり、次いでパワーポイントや映像教材の使用などが、肯定的な評価として記述されている。授業によっては、小グループでの学生同士の議論、あるいは教員との対話をおこなっており、こうした双方向型の授業はかなりの好感をもたれている。そうした双方向性の確保の一つとして、リアクションペーパーの授業への反映も評価が高い。そして、科目担当の教員の熱意や姿勢への学生の関心は高く、「熱く語る」教員は概して評価が高かった。

#### 5-2 「否定的な評価として多い意見の集約」

全般的に否定的な記述は少なく、2015年度から開講している四半期科目について、同じ曜日に2時限受講することの負担の大きさを指摘する（2016年度からは異なる曜日でも可となる予定）などカリキュラムに対する意見や、授業内容が多すぎてついていけないといった授業の進め方についての意見があった。

また、問題となっていた学生の私語などの「教室の静粛性」については、昨年度からは減少しているが、学生の遅刻や途中退出についての指摘は引き続き見られた。

### 6. 今後の改善に向けて

アンケート結果をみると、学生の事前事後の自己学習が消極的であり、本来は自己学習も含めて学生が主体的に学ぶべきだが、授業を「聞く」だけの学びになっているということが推測できる。この原因の一つとして、本学部の科目構成において、社会福祉士や教員などの資格取得のための科目が、他学部に比べて相対的に多いことがあげられるだろう。

資格科目では、その性格上、必要な専門知識の「伝授」に重きが置かれ、学生は知識を「習得」することに意識が向きやすいために、新たな知的発見や発展的勉強へとつながりにくい面があるように思われる。

多くの教員が、学生の学びの主体性を引き出そうとして様々な取り組みを行っており、改善されたものもあるが、学部全体として大きな成果を上げるには至っていない。

本学部が福祉やスポーツ等での対人援助や支援、コミュニティでの取り組みを研究領域としていることから、知識を覚えるだけではなく、現実から考察し、現場で組み立てられる実践的思考能力が期待されていると言えよう。そうであれば、授業で覚えるという消極的学びではなく、授業で学んだ事を自分の頭で考えて現実活かすための学びに高めることが、社会的要請としても求められていると言える。

この積極的な学びを促進する授業の在り方が、本学部の課題である。

黒板等の「板書のしかた」についてはまだまだ低い評価であり、改善が期待される。本学部の特徴として、視覚障害や聴覚障害はじめ様々な障害のある学生が他学部よりも比較的多く学んでいることがあげられる。

このため、これら障害学生の教育学習を保障するためには、一般的な板書法ではなく、それぞれの障害特性に合わせた配慮が求められる。2016年4月から施行された障害者差別解消法では、障害者の社会的障壁の除去のために必要な合理的配慮を行うことを求めており、大学においてもこれは当然のこととされている。

単に板書を増やせば良いということではなく、障害のある学生に対しても配慮したかたちで「伝達すること」の工夫など授業方法の改善が期待される。

なお、現在、授業においてパワーポイントや配付資料を多用する授業が少なくなく、板書をしない授業もある。このように授業における板書の比重が相対的に小さくなっている状況で「板書の仕方」を学生に問うても「該当しない」という回答が増大し、結果的に低い評価となっているとも考えられる。設問を見直す必要もあると考えられる。

四半期科目については、開設された初年度と言うこともあり、2015年度の授業評価からはその成果や改善点を分析して見いだすことは難しい状況である。2016年度は異なった曜日に授業を設定できるなど実施方法の修正もあることから、経緯を見守りながら経過観察することとしたい。

授業中の学生の私語については、学部として取り組み、2015年度には学生評価でも改善した。これまで「私語しない」、「私語できない」ような教室環境の実現を目指してきたが、理念的には、「私語させない」ことだけではなく、「私語したくない」と思えるような熱中できる授業を展開することが期待される。授業評価に対する担当教員のコメントでも、学生が意欲や熱意を持って授業に参加できるようにしたいという声が少なくなかった。教室の静粛性を確保するという教育環境面だけではなく、教育内容の面からも私語の問題を捉える必要があるといえよう。

## 4-10 現代心理学部

### 1. 科目選定方針とねらい

現代心理学部では、以下の方針により授業評価アンケート実施対象科目を選定した。

- (1) 学部専任教員が担当する「学部共通選択科目（旧カリ「総合展開科目）」全科目
- (2) 学部専任教員が担当する「初年次教育科目」
- (3) 学部専任教員が担当する「講義科目」及び「共通シラバスにより展開される一部の科目」

なお、「演習科目」「実験科目」及び「複数教員担当科目」は原則として実施対象としない、とした。また、例外として、実施対象とする科目を以下にあげる。

#### a. 「キャリアと心理学」

2014年度新設のキャリア支援科目。学生意見を継続聴取したいため、「学部専任教員」の例外として、兼任担当科目だが実施する。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

今回の回答率は、59.77%で、前年度から少し上がっており、大学全体の平均より少し低い値となったが、6割近い回答率であり、データとしての信頼度は、従来通り確保されていると考えられる。学部における傾向を見ると、「Ⅰ：授業への取り組み方」については、「Ⅰ1：授業への出席率」が90%以上と回答した学生が6割を超え、70-89%と回答した学生を加えると昨年度と同様、9割以上を占めており、高い値であった。授業への積極的な参加に関しては、「Ⅰ2：授業に積極的に参加した」の設問に対して「大いにそう思う」、「そう思う」と回答した学生がやはり昨年度と同様に6割を超えており、意欲的に取り組んでいると考えられる。とはいえ、「Ⅰ3：授業への準備」、「Ⅰ4：授業をきっかけにした発展的勉強」については、昨年度に引き続き低い値であり、授業内に限らず、授業を超えた自主的な学びを導くためには、授業外学習に具体的に関連付けた授業内の工夫が必要と思われる。授業の進め方に対する学生の評価に関しては、「Ⅱ8：映像視覚教材の効果的使用」が昨年度に引き続き高い評価を得るとともに、「Ⅱ9：教員は授業の準備を周到に行っていた」が高い評価を受けている。逆に評価が高くなかったのは、昨年度と同様、「Ⅱ7：板書の仕方」であった。パワーポイントなどの使用度が学生の授業に対する理解度を高めていることは評価できるが、同時に、授業が予定調和的に進行し、目の前の学生の理解の状況や反応に即応しにくくなる懸念もある。パワーポイントを使用する場合、板書とのバランス等を考慮する必要があると思われる。「Ⅲ：この授業から得ることができたもの」については、「Ⅲ1：自分にとって新しい考え方・発想」、「Ⅲ2：基本的な専門知識」が昨年度と同様に得点が高く、授業を通じて、押さえるべき基礎的な知識および応用的、発展的な学びや発想の双方を学生が獲得できたと考えていることがわかる。ただし、「Ⅲ3：自分で調べ、考える姿勢」がやや低い状況であり、これは、前述の「Ⅰ4：授業をきっかけにした発展的勉強」の低さと連動しているのではないかと考えられる。加えて、学生が主体的に問題提起をするなど、自ら十分に思考するまでには至っていないようにも思われる。

### 3. 担当教員の所見票に対するまとめ

#### 3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

概ね目標は達成された、予想通りの結果であった、というのが、「授業評価に対する担当教員の所見」の基調であったと考えられる。多くの所見から、学生の積極的な授業参加を促すために、授業中のワークや資料提示の仕方などについて、既にさまざまな工夫を行っていることが確認できる。また、今後どのような工夫によって、学生の意欲をさらに引き出し、授業の効果を高めていくことができるかを具体的に記載している所見も多く、教員たちがこのアンケート結果を活かしていこうとする姿勢が見受けられた。

#### 3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

教員の所見は内容も具体的で細やかな内容にまで及ぶものも多くあり、学生からの指摘に対して、各々の教員がきちんと応答しつつ所見を述べている様子が見える。授業中の学生の反応などで、教員はある程度は授業の内容や運営に関してその都度、調整したり工夫を重ねたりしていくものだが、やはり授業評価アンケートを通じた学生の具体的な記述による指摘は、教員のそうした授業の質の向上意欲を高めるとともに、改善策に向けた取り組みを具体的に思考させ促していく動因として、重要な機能を果たしていると思われる。

#### 3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

それぞれの教員が、学生の指摘に対して、真摯に応答して具体策を述べる等していた。また、発展的学習や能動的学びを促す仕掛け、仕組みづくりに関して、改善方針を記す教員が多く、集計データにみられる結果から見出される課題に対応して、各教員が今後の改善に向けて工夫をしていこうということが見受けられた。

### 4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

#### 4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

映像などの視覚的な資料が活用されていると、理解がしやすくなり良かったという意見が特に多かった。また、学生が入りやすい具体的な事例紹介も、学生の理解を深め、学生を惹きつけたことがわかり、教員がそれぞれに工夫を重ねていることがわかった。さらに、ゲストスピーカーが効果的に配置されていることがうかがえる肯定的な意見も多く、ゲストスピーカーの有効性が確認されたと考えられる。ゲストスピーカーが担当教員の授業を補強することで授業に厚みを持たせたり、ゲストスピーカーと担当教員のやりとりを学生にみせること自体が、学習効果や意欲を高めたりといった効果があったのではないと思われる。

#### 4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

昨年度と同様、授業の環境面に対する否定的な意見が目についた。授業規模と教室サイズとのアンバランス、室温設定の不適切、静音環境が維持されていない、板書がみえにくい、といった意見である。（マイクを使用している）教員の声が聞こえにくい、といった指摘も比較的あり、静音環境の維持という課題と合わせて、各教員が改善していく必要があると思われる。

## 5. 今後の改善に向けて

既に述べたように、学生は授業の出席度も高く、積極的な授業参加者も6割を超えて意欲的に取り組んでいると考えられる。また、「授業評価に対する担当教員の所見」も、概ね目標は達成された、というのが基調を成していた。とはいえ、データからも、教員が記す改善の方針においても、授業を超えた発展的学習を促す仕組みづくりが、大きな改善のポイントと考えられることが浮かび上がってくる。2014年度以前も、「自ら学習課題を見つけ、それを調べるような主体的・発展的な学習を導くこと」が課題としてあげられていたが、2015年度も、それに対する成果が得られていないという結果に終わったことになる。受動的になりがちな学生に対して、主体的な取り組みを促す抜本的な改善策を見出すのはなかなか困難であり、それに加えて授業規模や授業内容も様々である。しかし、視覚資料の提示やゲストスピーカーの活用等、それぞれの教員は状況をみながら現在も細やかに工夫を重ねて授業を運営しており、その努力を重ねていくことが、引き続き重要であることは確かである。四半期科目も今後少しずつ増えていくのではないかと考えられるが、そのような場合に、集中的な学習のなかで可能になる工夫なども、重ねていくことができるかもしれない。

出席率も高く、積極的な授業参加もなされているのに、主体的な学び、発展的学習へと至らない現状を、どう改善していくか。各教員個別の努力は、教員の所見などからみても総じて既に真摯に為されていると判断でき、さらなる改善を考えるには個別の授業を超えて、もしくはそれらを連携させて、関連授業間で相互参照しつつ講義をしたりする等、新たな工夫を検討する余地があるのかもしれない。そのためにも、教授会報告などで日々の教員間のコミュニケーションをとり、課題やその解決策についての情報共有などを図るなど、工夫していきたい。

## 4-1-1 全学共通カリキュラム

### 1. 科目選定方針とねらい

2015年度の全学共通カリキュラムでは、

- (1) 「宗教」「人権」「大学」に関わる「立教 A (FH)」科目
- (2) "学部提供科目"である「領域別 A (FF)」科目
- (3) 過去の一般教養科目を継承する色彩が強い「主題別 A」の 5 カテゴリにおける科目  
①人間の探究 (FA)、②社会への視点 (FB)、③芸術・文化への招待 (FC)、④心身への着目 (FD)、⑤自然の理解 (FE)
- (4) 「総合自由科目」

において、1 教員 1 科目の方針のもと、授業評価アンケートを実施した。実施合計は 301 科目であった。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

全学共通カリキュラム (以下、全カリ) の回答率は 62.28% で、母数 (履修者数) が 41,041 名と他学部よりも圧倒的に多かったものの、全学平均 (61.82%) よりも、若干高かった。学年ごとの回答者数については、1 年生 9,432 名、2 年生 7,963 名、3 年生 5,150 名、4 年生 2,323 名であり、学年が高くなるにつれて回答者が少ない傾向にあった。

授業への取り組み方 (I) についての結果をみると、ほぼ昨年度と同様であった。全カリ科目の特徴として、授業時以外に学習する時間が短いことが以前から挙げられていたが、昨年度と同様に、平均値で 0.78 ということで、1 時間未満と答えた学生の割合が多かったことがわかる。授業の進め方 (II) については、各項目で少しずつ平均値が上がっており、3 点台が 3 項目であった昨年度と比較しても 1 項目へと減少しており、改善傾向にある。授業から得ることができたもの (III) についても同様で、各項目において少しずつ数値が上がっている。また、総合的に授業を見た時の数値 (IV) も全項目について上昇している。

これらのことから、全カリを担当する多くの教員が授業改善にむけて様々な取り組みを実施した効果がアンケート結果に表れてきているということがわかる。設問項目どうしの相関係数を見ると、授業の進め方 (II) の「(II3) 各回の授業のねらい」、「(II4) 各回の授業内容」の明確さが、総合評価 (IV) の「(IV1) 授業のわかりやすさ」、「(IV2) 授業全体の目標の明確さ」に結びついていることがわかった。

授業規模別の比較においては、授業への取り組み方 (I)、授業の進め方 (II)、この授業から得ることができたもの (III) は規模が小さい 50 名以下の授業で若干高い傾向がみられるが、総合評価 (IV) の項目では、全く規模についての差はなく、以前のような、「全カリの授業は大人数科目が多くて、私語が多い」というイメージは払しょくされてきているとも言えよう。これについては TA・SA 制度、CHORUS や Blackboard の活用による成果と見てとれるかもしれない。しかしながら、静粛性に関して 150 名以上の科目を担当している先生の見所票をみると、私語については、散見される程度ではあるが、まだ書かれている。したがって、アンケートの数値としては改善されているものの、一部の授業については依然として残っている問題であることがわかった。

学年別平均の特徴としては、昨年度と同様、出席率に関して学年が進むにしたがって数値が低下していた (1 年生 92.56、2 年生 91.53、3 年生 90.24、4 年生 84.91)。一方で、「(I



4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした」の回答が1年生の3.01から4年生の3.31ポイントに、「(I6) この授業に関して授業以外に学習した時間」の回答が1年生の0.71から4年生の0.93ポイントに徐々に上昇しており、学年が進行するにしたがって学習意欲が増していることが明らかとなった。授業の進め方(II)に関する項目では、おおよその質問項目で学年が進むにしたがって高い値を示していた。この授業から得たもの(III)に関しては全項目について学年が高いほうが良い値を示していた。このような結果から総合評価(IV)に関しても学年が高いほど満足感が高いことがわかった。上級生になると科目を十分に選択して興味のある科目を取っている傾向にあること、単位修得についての意欲が高いことなどが原因として考えられる。

### 3. 各カテゴリの総評

#### 3-1 立教科目群

##### 1) 立教A(FH)

「立教A(FH)」は全カリ総合科目のなかでも、受講生の勉学意欲を最も刺激しにくい分野で、各平均値のほとんどが他の科目群の中でも最下位かそれに近いところに位置していると考えられていたが、2015年度のアンケート結果は、2014年度に比べて多くの設問項目で改善している。これは教員が学生の意欲と興味を掻き立てる努力をした結果であろう。特に総合評価(IV)の設問項目は、2014年度はすべて最下位だったが、全カリ科目全体の平均値まで評価が高まった。また、この授業から得ることができたもの(III)の設問項目はすべて平均値を上回る評価を得ている。大人数授業が多いので致し方ない点はあるが、教室の大きさ、受講生数、教室の設備や環境(V)の評価は低いので、適切な対策を講じる必要がある。このカテゴリで扱っていた「宗教」、「人権」、「大学」のテーマは、2016年度から「学びの精神」に引き継がれ、1年生を対象として行われているので、授業評価は厳しくなることが予想されるが、教員それぞれのさらなる創意工夫を目指したい。

#### 3-2 領域別科目群

##### 1) 領域別A(FF)

「領域別A(FF)」は、2012年から始まった科目群で、専門科目を提供する学部の学生は履修不可、という形式で運営されている。展開科目数は57科目、回答者4,392で、集計データから際立った傾向はそれほど見られなかったものの、「(II5) 十分な静粛性が保たれた」では他より高い結果がでるなど、全体的な満足度は高いものが多かった。その一方で、「(I3) 授業の十分な準備」や「(I4) 授業後の発展的展開等」、「(I5) シラバスの役立ち」に関しては他科目よりも低い結果がでており、専門外の科目であるために、予習復習の方法を難しく感じている学生が多い結果と言えるかもしれない。各設問の相関関係を見ると、「(IV1、IV2) ねらいや内容をわかりやすく工夫している」が多いからか、「(IV3) 学問的興味をかきたてられ」たり、「(IV4) 授業内容に満足している」学生が多かった。

さらに教員の所見票をみると、「熱心に参加したという学生が多い」、「積極的姿勢で学んでくれた」という肯定的意見がある一方で、「学生が授業で得られたものについての評価が高くない」などの意見がみられ、基礎を教える授業であるために、聞きやすさや内容の明確さを目指すことと、内容を専門的に深めていくことのバランスをどのようにとるのか、

難しさを感じていることが読み取れる。中には、授業においてレポート紹介と教員からの応答などを取り入れて双方向性をもたせるなど、授業への積極的参加を促す工夫がなされているケースもみられた。改善点として、教室が暑すぎたり、スクリーンがみにくいなどの施設面の他、教員の話す速度、パワーポイントの使用方法などを求める意見もあった。

2016年度のカリキュラム改革が、「専門的科目」を「一般教養科目」として教えるという領域別 A が抱える根本的な問題に対して、どのような影響を与えるのか、多角的視点から検証していくことが求められているといえる。

### 3-3 主題別科目群

#### 1) 主題別 A

##### ①人間の探究 (FA)

2014年度、「人間の探究」の授業の進め方(Ⅱ)に関する設問群のうち、「(Ⅱ7) 板書のしかたが適切だった」という設問を除いて、ほぼすべての設問で全カリ平均を上回る結果が表れ、2013年度と比較すると、授業の進め方について大きく改善されたとまとめた。しかし2015年度は、当該の設問群においては、すべて全カリ平均を下回っており、改めて今後の改善が必要であることが強く自覚される。とくに(Ⅱ7)は、全カリ科目群のなかでもっとも評価が低かった。これについては昨年度以来の課題ともなっているが、大きくは改善されなかったことが読み取れる。

その他、危惧される点として「(Ⅱ5) 十分な静粛性が保たれた」が全カリ科目群のなかで平均値が一番低くなっていることが挙げられる。200名を超える受講生がいる講義では、静粛性を保つことに困難が生じるのは致し方なく、また各教員が出席や遅刻者のチェックを行いつつも、静粛性を維持するための努力を続けていることが所見票からもわかる。100名程度の講義でも十分な静粛性が保たれていない科目が散見されることは、迅速な改善が望まれる点であろう。

授業の進め方(Ⅱ)に関する設問の評価が低いことは、「(Ⅳ1) わかりやすい授業だった」の評価の低さとも関わる。そもそも、哲学や宗教的内容などを含む「人間の探究」科目群は授業内容がわかりにくくなりがちだが、学科や学年の相違によって、受講生の予備知識などが異なるにも関わらず、各教員は理解を深めてもらおうと努力している。所見票からわかるこうした努力が続けられ、やがて大きな効果をもたらすことを期待したい。

##### ②社会への視点 (FB)

2014年度の総評に、Ⅰ～Ⅳは全カリとしてはコントロールできない項目であり、学部等による設問(Ⅴ)(教室の大きさ、受講者数、環境設備)だけが全カリとしてコントロールできる対象なので注視すると書いた。Ⅴについては昨年度より数値が改善した。学生にとっての環境は少し良くなったと思われる。念のためⅠ～Ⅳについて昨年度の数値と比較すると、Ⅱ～Ⅳは改善傾向であり教員の努力が窺える一方、Ⅰは横這いであり学生の意欲の改善が難しいことが窺える。

次に、所見票をみると、概ね高評価を受けているとの記述が多く、また、教員が周到に準備等をしていたことも窺える一方で、昨年度同様、未だ私語等がある等、学生の意識の低さも窺える。個々の教員の授業内容改善等のできることは概ねなされている一方、企業

が学生の成績を見ない（と多くの学生が思っているのではないか）という状況下で学生の意欲を高めることは構造的に難しく、システム的な改革でないと改善は難しいと思われる。「社会への視点（FB）」に限らないが、新たに始まった「学びの精神」の結果が来年注目される。なお、全カリでコントロールできないが、教室が暑いといった不満も散見されるようである。

### ③芸術・文化への招待（FC）

「芸術・文化への招待（FC）」は、授業の進め方（Ⅱ）や総合的な評価（Ⅳ）の設問群において、おおむね全カリ平均を上回る評点を獲得しており、各設問のほとんどで全カリ平均を下回っていた2014年度から大きく改善された。授業準備が周到に行われたこと、視聴覚教材を有効に利用したことなどが所見票から窺え、こうした努力が評価されたものと考えられる。

この科目群は、実際に音楽や映像を鑑賞したり、写真をみたりするなどを授業内容に盛り込んだ場合が多く、鑑賞の際の静粛性の維持には各教員が苦勞したようだが、「（Ⅱ5）十分な静粛性が保たれた」の評点も高く、教員の努力が反映された結果となっている。また音楽関連の実演では、ゲストスピーカーによる実演が受講生から高い評価を得ており、担当教員も多くの手応えを感じている。ゲストスピーカーの採用は、受講生に質の高い授業を用意することに有効に作用しているため、今後とも継続、さらに充実させていくことが望まれる。

「（Ⅱ1）聞きやすい話し方だった」での評点が若干低いことが、所見票によると、マイクの使用法に慣れていなかった、あるいは調節がうまくいかなかったということが、その原因と考えられる。ゲストスピーカーによる実演を今後充実させていくためにも、こうした点は改善が望まれるが、これは使用教室による制約・限界などもあると考えられ、教室配置などでの配慮も必要かと思われる。

### ④心身への着目（FD）

「心身への着目（FD）」は29科目でアンケートが実施され、2015年度の回答者数は3,866名であった。評価の平均値は学生自身についての設問である授業への取り組み方（Ⅰ）に比較して、授業についての設問である授業の進め方（Ⅱ）、総合評価（Ⅳ）の評価が高く、全カリ平均値を上回る数値となった。特に（Ⅳ）では2014年度に比較して全ての項目について高評価であった。分野別にみて最も高い数値を示した設問の内容から、この科目群は授業内容の量が適切だったこと、教科書、授業レジュメプリントや参考文献が効果的だったこと、そしてわかりやすい授業だったことがわかった。このことから、「心身への着目（FD）」の科目群については担当者の授業改善の成果が好意的なアンケートの数値として表れており、高く評価されるべきものであると思われる。

一方で、2014年度の傾向にも出ていたように、授業時以外に学習した時間については0.66と全く変化がなく、分野別でも最も少ない値であった。この点は引き続き、担当教員と情報を共有して授業以外の時間にも自主的に学習できるような仕組みづくり、あるいは工夫が求められる。2016年度から「学びの精神」の科目群ができることによって「心身への着目（FD）」について科目が再編成されることになるのでアンケート評価についても注目したい。

#### ⑤自然の理解 (FE)

「自然の理解 (FE)」カテゴリにおける各設問項目の評点は、全カリ平均と比較すると2014年度はほぼ全ての項目で上回っていたが、2015年度は授業の進め方(Ⅱ)、総合的な内容(Ⅳ)においては上回ったものの、授業への取り組み(Ⅰ)、授業から得ることができたもの(Ⅲ)、および受講環境(Ⅴ)において下回る結果となってしまった。

一般的に理系科目は内容が難しくなる傾向があるが、科目担当教員はその点をよく理解し、工夫を凝らした授業を行うことによって、授業の進め方(Ⅱ)や総合的な内容(Ⅳ)に関しては良好な結果が得られていると考えられる。この点に関して各教員の努力を高く評価したい。ただ、授業の進め方(Ⅱ)の中で唯一、「(Ⅱ6)教科書・授業レジュメプリント」についての評価が平均をかなり下回った。所見票によれば「映像視覚教材を重点的に準備したため」や、「自主学習を促すため意図的に準備しなかった」などが理由として挙げられており、教員の授業運営上の工夫の影響を受けた結果のようだ。今後はバランスを考えながら資料作成をする必要がある。

一方、授業への取り組み(Ⅰ)や、授業から得ることができたもの(Ⅲ)に関しては低い評点となっており、各教員もそれは実感しているようだ。文系学部が多い本学で、理系科目を担当する教員にとって、どのように学生の積極的な学習を促すかはなかなか難しい問題となっている。所見票には「レポートを課すことによって昨年度より改善された」との報告もある一方、「理系学問に対する壁をなるべく低くするため敢えて課題を出さなかった」とも記載されている。さらに「理系学生と文系学生の混在」によりレベル設定が難しく、内容によっては文系学生の自主学習を困難にしていることも考えられる。これらについては、各教員の試行錯誤の繰り返しと情報共有によって徐々に改善されていくことを期待したい。また受講環境(Ⅴ)については、所見票にも「受講者数に比べ教室が狭く、静粛性が保たれない」というような環境面に関する問題がいくつか指摘されている。設備に関しては直ちに解決できる問題ではないが、静粛性に関してはSAやTAを配置したり、各教員が毅然とした態度で臨むことによって改善に努めたい。

#### 3-4 総合自由科目

全カリ総合科目の平均値に比べて、例年同様に各項目の評価は非常に高い。少人数科目で学生の勉強意欲が高く、担当教員もしっかり応えている結果の表れであろう。一部の50～80名規模のクラスでは学生の取り組みが甘くなっているものもあるが、全体的に学生が積極的にかかわっているため、授業から得られるものが大きく、他の全カリ科目と比べて満足度も著しく高い。2014年度に見られた教室規模や教室設備の問題は基本的に解消したようだ。また、英語で実施している上級クラスの魅力的な授業内容や教員の熱意にもかかわらず、受講者数が少ないのは残念である。履修した学生の満足度は高いので、その点がシラバスで学生に伝わるように工夫する必要があるだろう。

#### 4. 今後の改善に向けて

2014年度の当欄の分析では、既に教員は相当な講義に対する創意工夫を実施していること、それに対する効果として徐々に評価の数値が上がってきていることが報告され、今後の改善点を見出すのは難しいという指摘がなされていた。しかしながら、今年度の所見票

でも、高評価に甘んじずにさらなる努力をしていきたいというコメントが多くみられた。課題は絞りにくい、数値ではっきりと出ている学生の自主的学習時間の改善について、どのような取り組みが考えられるかについては実際に進めていく必要があるように思われる。2014年度の授業評価アンケートに対する記載にもあるように、2016年度から始まる「学びの精神」の科目については、1年次春学期履修という特徴を持たせ、TA やゲストスピーカー、図書費等の資源投入を行っているので、教育効果が出てくるのか、筆記試験を義務付けたことにより授業運営が変わったのかについては是非とも分析していただき検証すべきと思われる。

## 4-12 学校・社会教育講座

### 1. 科目選定の方針とねらい

教職課程は毎年度「講義科目を対象に1教員1科目」を原則として実施している。他の課程は重点的科目を絞って実施し、数年で全科目が該当するように計画している。なお、履修者が5名を下まわった場合の実施の有無は、各課程の判断によっている。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

学校・社会教育講座の調査対象科目の履修者数は2,249名、回答者数は1,778名であり、回答率は79.06%となっている。

設問項目別平均値を見るならば、Ⅱ（授業の進め方）、Ⅲ（この授業から得ることができたもの）、Ⅳ（総合的評価）の設問項目群ではⅢ3を除いてすべて4以上の評価となっている。長年平均値3以上4未満だったⅡ7の（板書のしかた）が、今年度は4以上となっていることが目を引く。平均値3.5以上4未満のものでは低評価の順にⅠ3（履修にあたっての十分な準備）、Ⅰ5（シラバスは役立ったか）、Ⅲ3（自分で調べ考える姿勢）であった。3.5を下回る評価だった項目としては平均値3.41のⅠ4（発展的勉強）があり、Ⅰ6（授業時間以外の学習時間）も低評価（0.84）である。これらの低評価は例年のものであるが、Ⅰ4やⅠ6を改善するためには、Ⅲ3（自分で調べ考える姿勢）を促す工夫を探り続けていくことが長い時間はかかっても不可欠であろうと考えられる。

授業規模平均値では、総じて50名以下の規模の方が、51～100名の規模より平均値が高い。Ⅱ5（静寂性）、Ⅰ4（発展的勉強）、Ⅲ3（自分で調べ考える姿勢）では、前者と後者との間で優位な差があり、履修者の授業への積極的な取り組みやその後につながる自主的・主体的な学びを促すことは、50名以下の規模のほうが51～100名の規模よりはよりよいということは指摘できよう。

学年別平均値のデータにおいて、3年生と4年生では、Ⅳ3（学問的興味をかきたてられた）の平均値が1年生と2年生に比べて高いことが特徴となっている。また、Ⅰ6（授業時間以外の学習時間）において3年生が他の学年と比べてかなりの高評価となっているのは、講義を中心としつつも演習的な内容も含み込んだ3年生の必修科目がアンケート対象科目になっていることと関係していると推察される。

### 3. 担当教員の所見票に対するまとめ

#### 3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

多くの担当教員の所見が、学生の熱心さ、積極性を指摘している。他方で、Ⅰ6（授業時間以外の学習時間）の平均値の低さへの言及も多くの教員に共通しており、課題を出す頻度をあげて対応したいといった所見が見られる。また、アンケートの項目に、設備についての設問を入れた方がよいという意見も見られた。

#### 3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

配付資料、映像の活用など教材の工夫が、それぞれの科目で行われている様子がうかがわれる。記述による評価の中で、映像や資料の見え方・扱い方について課題がある旨の指摘があった場合には、その改善をはかりたいという真摯なレスポンスが見られる。また、グルー

ワーク、グループディスカッションや、前授業時のリアクションペーパーについて、次授業時に担当教員が紹介・コメントするといった、双方向型の授業の進め方の工夫が概ね好評であることについて、担当教員自身がその重要性を改めて認識していることがわかる。

### 3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

自分で調べ、自分で考えるという自律的な学習を促す授業展開を検討したいといった表明が少なからずみられたのは、授業評価の数値に即応したものと考えられる。I6（授業時間以外の学習時間）の低評価の現状を踏まえて、学習時間を増やす方策を検討したいと書く担当教員も多かったが、「予習・復習」といった学習スタイルを全うするかどうかにについても議論の余地があるのではないかといった声もあがっている。配布資料やパワーポイントなどのより効果的な使用をめざすといった言及も多かったが、これは記述による評価での意見に対するものと考えられる。

## 4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

### 4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

教員の入念な資料準備をはじめとする熱心な姿勢に対する高評価が多かった。授業時に、多様な見方、考え方を教員から提示されることや、グループディスカッションなどを通して他の参加者の考え方を知る機会を提供する授業に肯定的評価が目立っている。

### 4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

視覚教材やパワーポイントの見えにくさ、配布資料の分量などについて改善してほしいという意見が比較的多く見られた。また、一部であるが、静寂性が保たれていない授業について、学生からの不満がある様子が窺われた。その他、教員の努力では如何ともしがたいことを学生も理解した上で、教室設備（特に空調に関わる温度・湿度の状態）について改善してほしいという意見も散見された。

## 5. 今後の改善に向けて

前年度から引き続き課題となっているI4（発展的勉強）とI6（授業時間以外の学習時間）については、残念ながらI4、I6ともに、前年度より僅かではあるが平均値が下がっている（I4：前年度 3.42、本年度 3.41 / I6：前年度 0.88、本年度 0.84）。他方、I4、I6の平均値をあげていくことに連動すると考えられるIII3（自分で調べ考える姿勢）については、昨年度より僅かながら平均値が上がっている（前年度 3.72、本年度 3.75）。

I4やI6については、継続的に科目を担当している教員たちも、努力してもなかなか数値に表れない項目であると認識しており、そのスコアを上げていくためには、授業時間以外で行う課題を増やすこと以外に方策はないかもしれない。前年度の当欄でさらに重視していくと言及された双方向型授業については、実際に双方向型授業を実施・改善することによって学生の参加度、能動的な学習姿勢を高める努力を、各教員がかなり自覚的に行うようになってきていると考えられる。学生の記述による評価に対応して、配布資料や板書・パワーポイントなどの改善、さらなる工夫が、各教員によって行われていくことが、各教員に可能な今後の改善ということになる。

## 5. 2015年度のまとめと今後の展望

2015年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会  
委員長 河村 賢治

立教大学の「学生による授業評価アンケート」は、学生による授業評価と教員による応答・改善の仕組みを通じて授業の質を高めようとするものであり、本学における教育インフラの重要な一部となっている。こうした意義を持つ授業評価アンケートが2015年度も無事に実施され、報告書の作成に至ったのは、関係各位のご尽力によるものである。心より感謝の意を表したい。

### 1. 2015年度の実施状況

2015年度の「学生による授業評価アンケート」は、2009年度に教育改革推進会議において策定された「基本方針」に基づき、各学部等の必要に応じて実施科目を選定するという方針のもと行われた。

アンケートの実施科目数は春学期 539 科目、秋学期 491 科目、合計 1,030 科目であり、全学の実施率（実施科目数／実施予定科目数）は 97.90%、所見票提出率（所見票提出数／実施科目数）は 80.38%であった。

### 2. 大学全体の課題

各学部等の総評を読むと、それぞれの学部等や教員が創意工夫をして授業の質を高める努力をしていることが分かる。

もっとも、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」、「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」などの項目については、学生の取り組みが不十分であると認識している学部等が多く、どのようにすれば学生の主体的な学びを促すことができるのかが大学全体の課題となっているように思われる（なお、これらの項目に対する今年度の回答結果（数値の高低）は、各学部等が選定したアンケート対象科目の性質（講義系か演習系かなど）によって変わってくると予想されるため、単純な学部等間比較はできないことを付言しておく）。

この課題に関して、観光学部の総評には、「授業に出席し、卒業に必要な単位を取得することのみでは、大学が伝えようとする学術研究の豊かさや深さを十分獲得できないことを、自習時間を含む単位制度の考え方とともに、繰り返し学生に伝えていく必要がある」との指摘がある。「自習時間を含む単位制度の考え方」は、学生のみならず、教員も十分に理解しておくべき事項であるため、ここであらためて単位制度について確認しておきたい（p.60「資料：単位制度の概要」参照）。



## 資料：単位制度の概要

我が国の大学教育は単位制度を基本としており、1単位あたり45時間の学修を必要とする内容をもって構成することが標準とされています。ここでいう1単位あたりの学修時間は、授業時間内の学修時間だけでなく、その授業の事前の準備学修・事後の準備復習を合わせたものとなっています。

こうした単位制度のもとでは、大学生は、単に大学の教室で授業を受けるだけでなく、教室外での自主的な学修を行うことが求められます。また、各大学では、それぞれの授業で単位数に応じた授業時間を適切に確保することが必要となるほか、学生の授業外での学修を促すことも重要といえます。

このため、大学は学生に対し、シラバス等により、それぞれの授業の年間スケジュールや毎回の講義内容を詳細に明示し、講義の前提として読んでおくべき文献を指示することなどにより、学生の準備学修・復習について適切な指示を与えることが求められます。また、大学での授業内容についても、単に授業に出席しさえすれば授業内容が全て理解できるようなものとするのではなく、授業外の学修を行うことを前提として設計することが求められます。大学の国際化が進展する中、1単位あたりの学修時間を確保するための取組は、我が国の大学で授与された学位や単位等が他の国で適切に評価されるための重要な基礎であり、我が国の大学教育の国際的な質保証にもつながるものといえます。

このような中、各大学においては、シラバス等において各回の詳細な授業内容や授業外の学修に関する具体的な指示を与えるといった取組が行われています。

また、こうした授業等の改善も含め、教員の教育活動に対するインセンティブを高める観点から、教員の業績評価及び顕彰に取り組む大学も見られます。

文部科学省においても、平成19年に大学設置基準を改正して、大学は学生に対して、授業の方法及び内容、一年間の授業の計画をあらかじめ明示するものとするなど、大学の取組を促す方策を講じています。

### 大学設置基準

第21条 各授業科目の単位数は、大学において定めるものとする。

2 前項の単位数を定めるに当たっては、一単位の授業科目を四十五時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準により単位数を計算するものとする。

一 講義及び演習については、十五時間から三十時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもって一単位とする。

二 実験、実習及び実技については、三十時間から四十五時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもって一単位とする。ただし、芸術等の分野における個人指導による実技の授業については、大学が定める時間の授業をもって一単位とすることができる。

三 一の授業科目について、講義、演習、実験、実習又は実技のうち二以上の方法の併用により行う場合については、その組合せに応じ、前二号に規定する基準を考慮して大学が定める時間の授業をもって一単位とする。

3 (略)

出所：文部科学省「大学の教育内容・方法の改善に関するQ&A（平成26年2月更新）」のQ3より抜粋〔[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/003.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/003.htm)〕（最終検索日2016年8月1日）

例えば、2単位の講義科目であれば90時間の学修時間が必要になるところ、このうち30時間を授業時間とするのであれば、残りの60時間は授業時間外の学修時間として確保されていなければならないことになる。したがって、当該科目の教員は、30時間分の講義を実施するだけでなく、学生が60時間分の事前・事後学修を行うよう働きかけることが求められる。問題は、どのようにして学生の自学自習を動機付けるかである。

授業によって学生の知的好奇心を刺激し、教員が特段の指示をしなくても学生が自発的に学修に取り組むようになるというのが理想の姿かもしれないが、実際はなかなか難しいというのが正直なところではないだろうか。そこで、例えば異文化コミュニケーション学部の総評にあるように、学生から「宿題の分量が多く、大変だった」と言われるくらいの宿題を出すことも方策の一つとして検討されてよいのかもしれない。履修者の数が多く、教員一人で宿題のチェックをすることが難しい場合には、TAを活用することもありえよう。

また、法学部の総評を読むと、主体的・積極的な学習の動機付けに成果を挙げていると思われる取り組み（ベストプラクティス）について、教員間で情報共有を行ったとある。こうしたベストプラクティスの内容は、他学部等においても参考になると思われるので、今後は全学的に情報共有していくことが望ましいのではないだろうか。

2016年度の「学生による授業評価アンケート」は、3年に1度の「1教員1科目」を対象とするものであるから、いかなる取り組みが学生の自学自習を促すのに効果的であるのかを、広く検討するよい機会であると思われる。各学部等において確認された効果的な取り組みの内容が2016年度の総評に記載され、全学的に情報共有されることを期待したい。2017年度には、このデータの一部を用いて教育活動特別賞における推薦者の選考も各学部で検討される。各学部の特性に応じた効果的な取り組みを確認できる機会ともなるであろう。



## 6. 2013 年度「学生による授業評価アンケート」のデータを用いた追加分析

大学教育開発・支援センター 教学 IR 部会

学術調査員 大嶋 玲未

### 1. はじめに

学生の学習意欲は学力や学習成果と関連するばかりでなく、就職活動への主体的取り組みや、仕事における知識の獲得、仕事の満足度との関連性が指摘されるなど、近年ではキャリア教育の観点からも注目されている（見館他，2008）。こうした学習意欲は学生の基礎知識、基礎学力や性格特性、自己概念といった学習者側の要因によっても左右されるが、授業の構成要素や教員の働きかけによって高められるものでもある（溝上，1996）。教員の授業設計や取り組みが学生の学習意欲にどのように影響するかについては、FD 活動の一環として、教職員間で共有されるべき知見といえるだろう。ところが、それらの関連性について検証した研究は少ない。そこで教学 IR 部会では、2013 年度「学生による授業評価アンケート」の前・後期合併データを用い、教員の授業のねらいや授業内容の明確さ、内容量の適切さといった「授業設計や運営の仕方」が、学生の学習意欲（授業に対する意欲）や、授業の満足度を含めた学生の意識に及ぼす影響を明らかにするため、分析を行った。

### 2. 使用したデータ

分析には、2013 年度前期（2013 年 7 月）及び 2013 年度後期（2014 年 1 月）に実施した、2013 年度「学生による授業評価アンケート」のデータを用いた。実施科目は前期 860 科目、後期 806 科目の計 1,666 科目である（実施予定数 1,702 科目、実施率 97.89%）（立教大学 2013 年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会，2014）。データの回収数（回答者延べ数）は前期 63,137、後期 46,890、計 110,027 であった。

### 3. 分析結果の報告

#### 1) 因子構造の検討

はじめに、調査票に含まれる項目の内容と記述統計量を Table 1 に示す。

Table 1 調査票の項目内容及び記述統計量 (2013 年度前・後期合併データ)

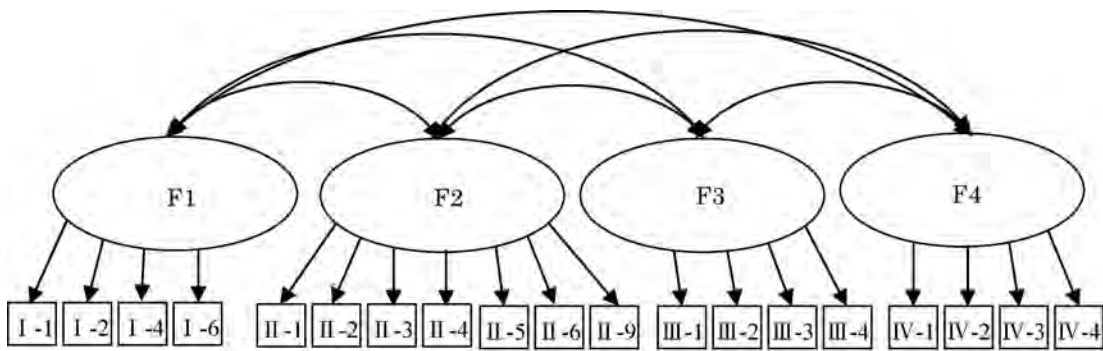
設問	項目内容	度数	平均値	標準偏差
I	この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。			
1	授業全体を通じての出席率	109802	4.55	0.72
2	この授業に積極的に参加した	109778	3.91	0.96
3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	109696	3.27	1.03
4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	109616	3.19	1.09
5	シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	109187	3.56	1.02
6	この授業に関連して、授業時以外に学習した時間	109558	2.27	1.09
II	この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。			
1	聞きやすい話し方だった	109744	4.02	1.04
2	各回の授業内容の量が適切だった	109725	4.00	0.96
3	各回の授業のねらいは明確だった	109669	4.00	0.97
4	各回の授業内容は明確だった	109592	4.04	0.95
5	十分な静粛性が保たれた	109557	4.00	1.05
6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	108700	3.92	1.02
7	板書のしかたが適切だった	65775	3.60	1.09
8	映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった	88027	4.13	0.96
9	教員は授業の準備を周到に行っていた	107169	4.26	0.85
III	この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。			
1	自分にとって新しい考え方・発想	109610	3.90	0.96
2	授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	109606	3.89	0.92
3	自分で調べ、考える姿勢	109570	3.47	1.04
4	授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	109427	3.78	0.97
IV	総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。			
1	わかりやすい授業だった	109583	3.96	1.03
2	授業全体の目標が明確だった	109577	3.98	0.97
3	学問的興味をかきたてられた	109569	3.83	1.05
4	この授業を受けて満足した	109559	3.93	1.03

注1) 設問 I\_1 の回答選択肢は「5: 90%以上」～「1: 30%未満」、設問 I\_6 は平均して1週間に「5: 3時間以上」～「1: 0時間」、それ以外の項目は「5: 大いにそう思う」～「1: そう思わない」の5件法である。

注2) 設問 II\_7,8 には「9: 該当しない」の回答選択肢が含まれていたため、9と回答したデータに関しては集計から除外した。

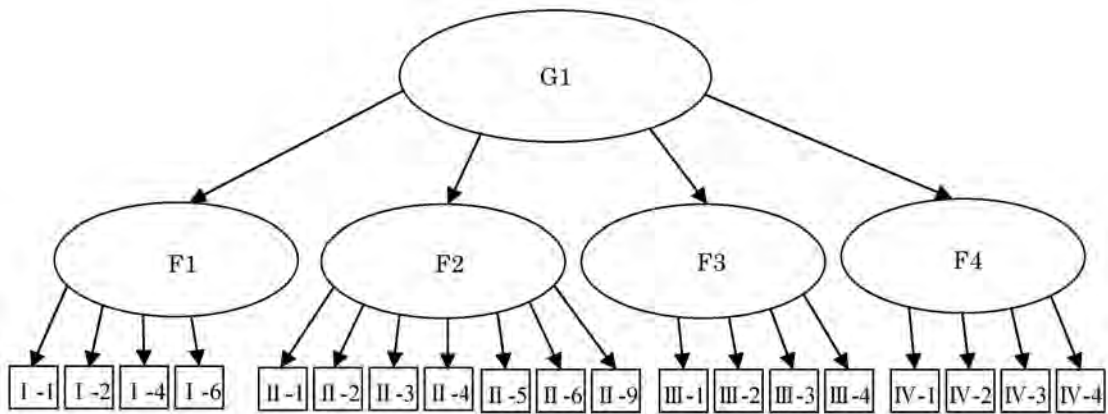
これらの 23 項目は、調査票上では 4 つの設問 (I - IV) に集約されている。しかし、学生の調査票の回答パターンを、設定された設問の枠組みで集約することが妥当であるかは明らかではない。そこで項目の因子構造を確認するために、確証的因子分析を実施した。

分析にあたり、設問の区分に準拠した 4 因子モデルを仮定した (Figure 1.)。なお、設問 I は主に学生の授業に対する意欲について問う内容であったが、設問内には授業受講前の態度やシラバスの有用性について尋ねる内容 (設問 I の項目 3, 5) と、授業の出席率や、授業外学習時間、参加への積極性といった授業・学習意欲に関連する内容 (設問 I の項目 1, 2, 4, 6) が含まれており、学生の学習意欲 (授業に対する意欲) を検討するにあたっては設問内で項目を絞り込む必要があると考えられた。また、設問 II の項目 7, 8 は教員の板書や映像視覚教材の使用の仕方について尋ねる項目であったが、教員によっては授業内で板書や映像視覚教材を用いないことから、これらの項目には「9: 該当しない」の回答選択肢が設定されていた。そこで、設問 I の「3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」、「5 シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った」の 2 項目、設問 II の「7 板書のしかたが適切だった」、「8 映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった」の 2 項目については、モデルから除外することとした。適合度算出のため、分析に使用する 19 項目に欠損値が含まれていたサンプルを除いた 104,768 名のデータを分析に使用した。またモデル比較のため、設問区分に準拠した 4 因子を説明する共通因子が存在することを仮定した共通因子モデル (Figure 2.)、すべての調査項目が 1 因子で説明されると仮定した 1 因子モデル (Figure 3.) についても作成し、それぞれの適合度を比較した。各モデルの適合度を Table 2 に示す。



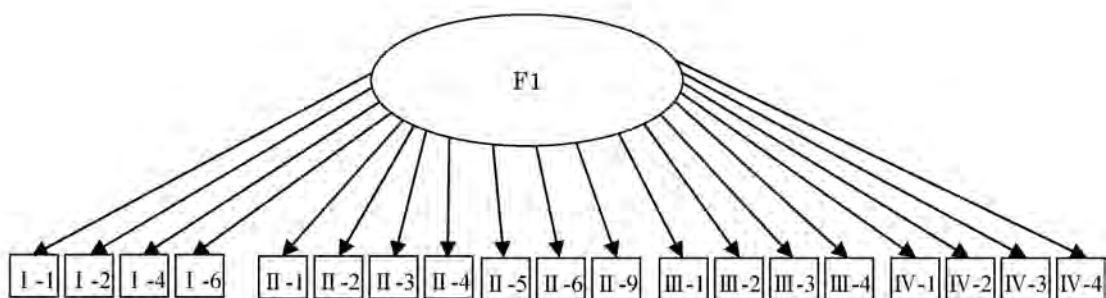
注) 誤差変数は略記してある。

Figure 1. 4 因子モデル



注) 誤差変数は略記してある。

Figure 2. 共通因子モデル



注) 誤差変数は略記してある。

Figure 3. 1 因子モデル

Table 2 各モデルの適合度

モデル	$\chi^2$	df	p	GFI	AGFI	CFI	RMSEA	AIC
Figure 1. 4因子モデル	99655.138	146	.000	.90	.87	.93	.08	99743.138
Figure 2. 共通因子モデル	113221.601	148	.000	.88	.85	.92	.09	113305.601
Figure 3. 1因子モデル	241217.119	152	.000	.74	.67	.83	.12	241293.119

適合度指標として、 $\chi^2$  値、GFI、AGFI、CFI、RMSEA、AIC を表記した。これらは、モデルを評価する際に参照される指標である。一般に  $\chi^2$  値は小さく、有意でないほうが望ましい<sup>1</sup> (小塩, 2008)。また、GFI (Goodness of Fit Index)、AGFI (Adjusted Goodness of Fit Index)、CFI (Comparative Fit Index) の値は 1 に近いほど、RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation) の値は 0 に近いほど良いモデルであると判断される (小塩, 2008)。AIC (Akaike's Information Criterion) は、複数のモデルを比較する際に参照される指標のひとつである。絶対的な判断の基準はないものの、複数のモデルを比較する際には AIC の低いモデルを選択することが望ましいとされる (小塩, 2008)。

これらの基準に基づきモデルの適合度を比較すると、1 因子モデル (Figure 3.) ではモデルの当てはまりが悪いことがわかる。4 因子モデル (Figure 1.)、共通因子モデル (Figure 2.) の適合度についてはいずれも許容できる値であると考えられたが、相対的な当てはまりの良さと、AIC の値から判断し、4 因子モデル (Figure 1.) を採用した。各因子に含まれる項目の内容から、4 因子モデル (Figure 1.) の設問 I を説明する因子 (F1) を「I 授業に対する意欲」、設問 II を説明する因子 (F2) を「II 教員の授業設計や運営」、設問 III を説明する因子 (F3) を「III 授業から得たもの」、設問 IV を説明する因子 (F4) を「IV 授業の満足度」とそれぞれ命名した。各因子の内的整合性を確認するために信頼性係数を算出したところ、「I 授業から得たもの」では  $\alpha = .65$ 、「II 教員の授業設計や運営」では  $\alpha = .90$ 、「III 授業から得たもの」では  $\alpha = .88$ 、「IV 授業の満足度」では  $\alpha = .93$  であった。一部の因子では  $\alpha$  がやや低い値であったものの、概ね許容できる値が確認されたと判断し、各因子に含まれる項目の平均値をそれぞれの因子得点とした。各因子の記述統計量を Table 3、因子間相関を Table 4 に示す。

脚注<sup>1</sup>  $\chi^2$  値は本研究のようにサンプルサイズが大きい場合、有意になる傾向を有する。しかし、有意な  $\chi^2$  値が得られたとしてもモデルの適合度判断の際に問題とはならないことが指摘されている (e.g., 小塩, 2008)。

Table 3 各因子の記述統計量

因子名	度数	平均値	標準偏差
I 授業に対する意欲 (F1)	109261	3.48	0.68
II 教員の授業設計や運営 (F2)	105702	4.04	0.77
III 授業から得たもの (F3)	109334	3.76	0.83
IV 授業の満足度 (F4)	109493	3.93	0.92

Table 4 因子間の相関

	I	II	III	IV
I 授業に対する意欲 (F1)	—			
II 教員の授業設計や運営 (F2)	.42	—		
III 授業から得たもの (F3)	.59	.67	—	
IV 授業の満足度 (F4)	.48	.83	.77	—

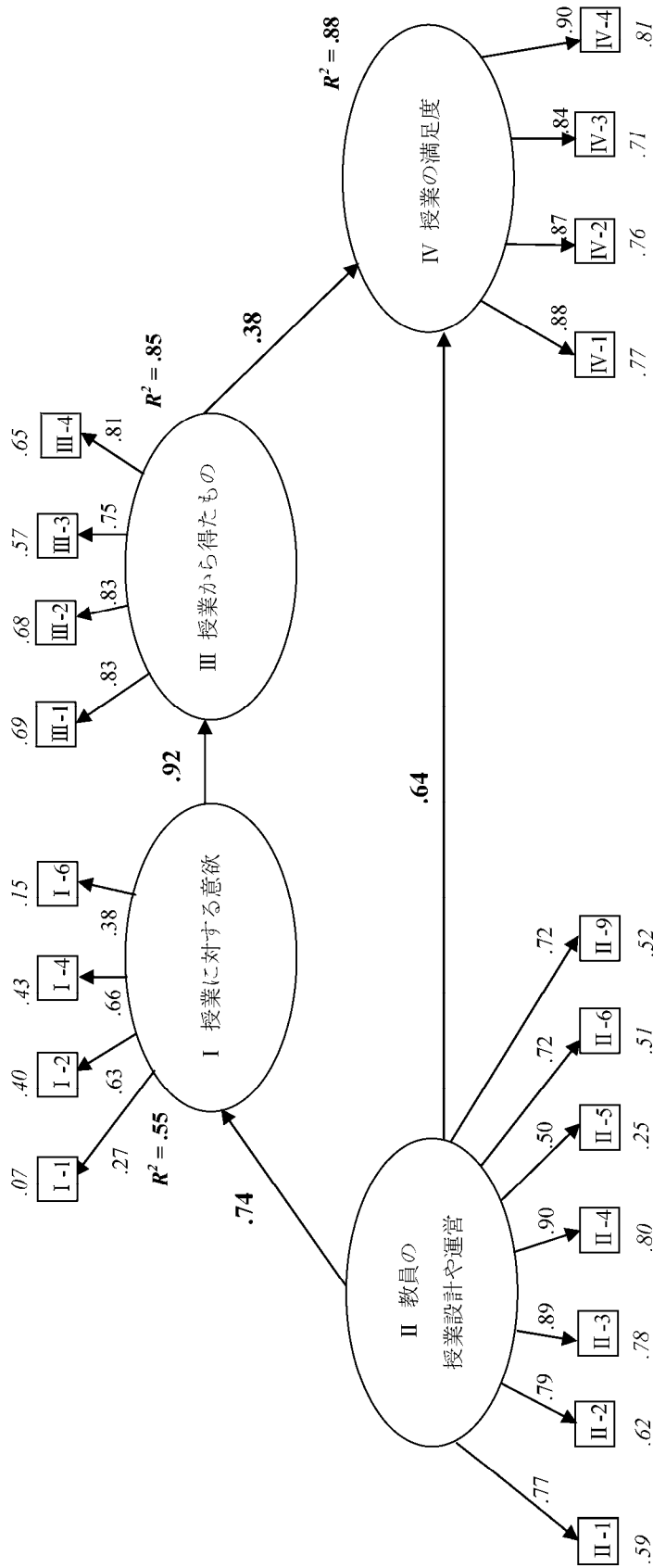
注)いずれの相関係数も0.1%水準で有意であった。

## 2) 教員の授業設計や運営の仕方が学生の意識に及ぼす影響

教員の授業設計や運営の仕方が、学習意欲（授業に対する意欲）や授業の満足度といった学生の意識にどのように影響を及ぼすかを検討するため、「II 教員の授業設計や運営」をモデルの起点とし、「I 授業に対する意欲」、「III 授業から得たもの」、「IV 授業の満足度」に及ぼす影響を想定したモデルを作成した。モデルの適合度と説明可能性から判断し、最終的に Figure 4.に示すモデルを採用した。モデルの適合度は GFI = .89, AGFI = .85, CFI = .92, RMSEA = .09 であった。

まず、「II 教員の授業設計や運営」は、「IV 授業の満足度」を高めていた。また、教員の授業設計や運営が適切に行われることで、学生の「I 授業に対する意欲」が高くなり、それにより、「III 授業から得たもの」で説明されるような自分にとっての新しい考え方・発想、専門知識などを得たという実感が高まり、その結果としても「IV 授業の満足度」は向上していた。





$n = 104768$

- 注 1) いずれの係数も 0.1%水準で有意であった。
- 注 2) イタリックスは決定係数を表す。
- 注 3) 誤差変数は略記してある。

Figure 4. 教員の授業運営や設計が学生の意識に与える影響

#### 4. 考察とまとめ

本章では、2013年度「学生による授業評価アンケート」の前・後期合併データを用い、教員の授業設計や運営の仕方が学生の学習意欲、授業の満足度といった学生の意識に及ぼす影響について分析した結果を報告した。

Figure 4.のモデルでは、「II 教員の授業設計や運営」から「IV 授業の満足度」に対して直接のパスが繋がった一方で、「I 授業に対する意欲」、「III 授業から得たもの」を介して「IV 授業の満足度」へと影響する間接のパスが繋がった。つまりこの結果は、「II 教員の授業設計や運営」から「IV 授業の満足度」への直接の影響を統制しても「I 授業に対する意欲」、「III 授業から得たもの」を介して「IV 授業の満足度」へと至る影響は残ることを示している。

我々は、学生の学習意欲は所与の条件であり、教員の力では変えられないものであると思いがちである。授業評価アンケートについての関心も、教員の取り組みや努力の程度が反映されやすいと考えられる「授業の満足度」に集中してきたように思われる。しかし、教員の授業に対して前向きに取り組み、努力することによる効果は、単に学生の授業に対する満足度を高めるばかりでないことが分析からは明らかになった。教員の授業への前向きに取り組む姿勢や努力は、学生の学習意欲の向上を促し、学生の授業への参加の促進、授業外学習時間の増加といった望ましい結果に繋がる可能性があるということは、今回の分析結果から得られた重要な示唆である。

今回の分析の限界として、使用したデータが横断的であったため変数間の因果関係を正確に推定することができなかった点、分析に使用できる変数が限られていた点が挙げられる。今後はパネルデータを用いるなどをしての正確な形での因果関係の検証や、教員の授業設計や運営の仕方以外の要因の影響についても考慮を含めた検証が必要であろう。これらの課題も踏まえ、教学 IR 部会では今後も継続的に、教育や授業改善に寄与することを目指した調査、分析を実施する予定である。

#### 【 引用文献 】

見館好隆・永井正洋・北澤武・上野淳（2008）大学生の学習意欲，大学生生活の満足度を規定する要因について 日本教育工学会論文誌, 32(2), 189-196.

溝上慎一（1996）大学生の学習意欲 京都大学高等教育研究 2, 184-197.

小塩真司（2008）はじめての共分散構造分析—Amos によるパス解析 東京図書

立教大学 2013 年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会（2014）2013 年度「学生による授業評価アンケート」報告書。立教大学大学教育開発・支援センター



## 7. 集計データ（資料編）

### 7-1 回答者数・回答率

延べ回答者数 70,343名

表1 学部等別履修者数と回答者数、および回答率

科目開設学部等	履修者数	回答者数	回答率
文	9,608	6,905	71.87
経済	3,676	2,726	74.16
理	6,619	4,132	62.43
社会	16,938	9,435	55.70
法	2,057	1,099	53.43
経営	13,252	6,928	52.28
異文化コミュニケーション	410	377	91.95
観光	1,871	1,294	69.16
コミュニティ福祉	11,997	7,675	63.97
現代心理	4,072	2,434	59.77
全学共通カリキュラム	41,041	25,560	62.28
学校・社会教育講座	2,249	1,778	79.06
合計	113,790	70,343	61.82

注1) 履修者数・回答者数は、アンケート実施科目の延べ履修者、回答者

注2) 学部等は、アンケート実施科目の開設学部により分類した

表2 学部等別学年別の回答者数

科目開設学部等	1年	2年	3年	4年	不明	合計
文	2,537	2,208	1,428	574	158	6,905
経済	2,248	235	128	57	58	2,726
理	1,116	1,517	1,142	293	64	4,132
社会	2,664	3,116	2,638	828	189	9,435
法	417	346	174	144	18	1,099
経営	1,562	1,860	2,130	983	393	6,928
異文化コミュニケーション	229	109	4	4	31	377
観光	864	167	165	80	18	1,294
コミュニティ福祉	1,718	2,827	2,384	636	110	7,675
現代心理	488	851	800	249	46	2,434
全学共通カリキュラム	9,432	7,963	5,150	2,323	692	25,560
学校・社会教育講座	589	690	391	54	54	1,778
合計	23,864	21,889	16,534	6,225	1,831	70,343

注1) 回答者数は延べ人数

注2) 学年は、当該学部等で実施したアンケートに回答した学生の学年を示す

注3) 学部等により実施科目の選定方針が異なるため、学年の偏りがある

## 7-2 学部等別平均値

表3 文学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率 <sub>*1</sub>	6,896	92.51	12.15
I 2 この授業に積極的に参加した	6,891	4.04	0.90
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	6,886	3.45	1.01
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	6,881	3.38	1.09
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	6,857	3.63	1.02
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 <sub>*2</sub>	6,877	1.02	0.99
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	6,894	4.12	0.98
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	6,891	4.10	0.93
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	6,891	4.09	0.92
II 4 各回の授業内容は明確だった	6,884	4.14	0.91
II 5 十分な静粛性が保たれた	6,881	4.03	1.05
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	6,809	4.01	0.99
II 7 板書のしかたが適切だった	4,395	3.70	1.09
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	4,753	4.24	0.92
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	6,702	4.35	0.82
<b>III この授業から得るものができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	6,888	4.04	0.94
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	6,889	3.99	0.90
III 3 自分で調べ、考える姿勢	6,890	3.69	1.04
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	6,878	3.85	0.97
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	6,889	4.08	0.98
IV 2 授業全体の目標が明確だった	6,887	4.09	0.93
IV 3 学問的興味をかきたてられた	6,889	3.98	1.01
IV 4 この授業を受けて満足した	6,890	4.07	0.98
<b>V 学部等による設問</b>			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	6,602	4.26	0.98
V 2 この授業の受講者数は適切だった	6,599	4.21	0.98

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) II 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表4 経済学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率 <sub>*1</sub>	2,722	92.52	14.43
I 2 この授業に積極的に参加した	2,719	4.10	0.96
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,716	3.51	1.09
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,711	3.37	1.13
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	2,707	3.33	1.14
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 <sub>*2</sub>	2,713	1.17	1.05
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	2,717	4.02	1.03
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	2,719	3.93	1.05
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	2,714	4.01	0.98
II 4 各回の授業内容は明確だった	2,712	4.02	0.99
II 5 十分な静粛性が保たれた	2,710	3.80	1.13
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,691	3.92	1.03
II 7 板書のしかたが適切だった	1,929	3.76	1.08
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	1,833	3.90	1.04
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,659	4.17	0.95
<b>III この授業から得るものができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	2,712	3.70	1.00
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	2,712	3.88	0.93
III 3 自分で調べ、考える姿勢	2,708	3.63	1.04
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	2,706	3.64	1.00
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	2,712	3.91	1.07
IV 2 授業全体の目標が明確だった	2,711	3.98	1.00
IV 3 学問的興味をかきたてられた	2,711	3.66	1.11
IV 4 この授業を受けて満足した	2,712	3.81	1.06
<b>V 学部等による設問</b>			
V 1（全科目共通設問）教室の規模と設備は適切であった	2,362	4.21	0.93
V 2（基礎ゼミナール1）経済文献を読む力がついた	611	3.83	0.96
V 3（基礎ゼミナール1）レジュメやレポート作成の力がついた	611	4.12	0.89
V 4（情報処理系科目）表計算ソフト（Excel）の応用力が身についた	767	4.13	0.88
V 5（情報処理系科目）Power Point でプレゼンテーション資料を作成する力が身についた	759	3.88	1.06
V 6（情報処理系科目）WEB 上から経済資料・統計資料を入手する力が身についた	768	4.03	0.94

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) II 1は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I 6は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表5 理学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率* <sub>1</sub>	4,121	93.07	14.42
I 2 この授業に積極的に参加した	4,119	4.05	0.98
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	4,116	3.48	1.06
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	4,113	3.41	1.10
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	4,103	3.47	1.08
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* <sub>2</sub>	4,114	1.23	1.01
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	4,119	3.95	1.06
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	4,116	3.88	1.02
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	4,115	3.94	0.98
II 4 各回の授業内容は明確だった	4,110	3.96	0.99
II 5 十分な静粛性が保たれた	4,112	4.13	0.98
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4,092	3.91	1.07
II 7 板書のしかたが適切だった	3,340	3.84	1.07
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	2,776	3.95	1.04
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4,031	4.17	0.90
<b>III この授業から得るものができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	4,108	3.81	0.99
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	4,106	3.93	0.94
III 3 自分で調べ、考える姿勢	4,106	3.67	1.03
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	4,103	3.60	1.04
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	4,108	3.82	1.09
IV 2 授業全体の目標が明確だった	4,105	3.93	0.99
IV 3 学問的興味をかきたてられた	4,106	3.74	1.09
IV 4 この授業を受けて満足した	4,106	3.81	1.06
<b>V 学部等による設問</b>			
V 1 シラバスに沿って授業が行われた	4,022	3.96	0.90
V 2 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた	4,016	4.01	0.93
V 3 (1年次春学期必修科目のみ)教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開をしてくれた	479	3.65	1.09
V 4 (必修科目のみ)授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同士が共同して解決策をとった	2,207	3.79	1.07

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表6 社会学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率* <sub>1</sub>	9,409	91.35	14.04
I 2 この授業に積極的に参加した	9,409	3.83	0.95
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	9,403	3.23	1.00
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	9,394	3.08	1.07
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	9,365	3.56	1.00
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* <sub>2</sub>	9,368	0.82	0.90
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	9,396	3.97	1.01
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	9,397	3.99	0.91
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	9,391	3.96	0.94
II 4 各回の授業内容は明確だった	9,385	3.99	0.93
II 5 十分な静粛性が保たれた	9,378	3.80	1.16
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	9,301	3.79	1.03
II 7 板書のしかたが適切だった	5,211	3.56	1.03
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	7,986	4.10	0.94
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	9,210	4.20	0.83
<b>III この授業から得るものができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	9,387	3.86	0.93
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	9,382	3.83	0.90
III 3 自分で調べ、考える姿勢	9,370	3.40	1.03
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	9,358	3.82	0.94
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	9,377	3.92	1.00
IV 2 授業全体の目標が明確だった	9,375	3.93	0.94
IV 3 学問的興味をかきたてられた	9,375	3.80	1.02
IV 4 この授業を受けて満足した	9,372	3.88	1.00

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0



表7 法学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率 <sup>*1</sup>	1,097	87.73	19.58
I 2 この授業に積極的に参加した	1,096	3.67	1.16
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	1,095	3.01	1.14
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	1,094	2.78	1.16
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	1,088	3.28	1.15
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 <sup>*2</sup>	1,092	0.82	0.88
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	1,096	3.52	1.34
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	1,095	3.79	1.08
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	1,096	3.76	1.13
II 4 各回の授業内容は明確だった	1,089	3.81	1.11
II 5 十分な静粛性が保たれた	1,093	3.59	1.42
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	1,081	3.64	1.14
II 7 板書のしかたが適切だった	700	3.20	1.17
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	685	3.54	1.10
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	1,075	3.88	1.10
<b>III この授業から得るものができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	1,092	3.51	1.19
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	1,092	3.54	1.09
III 3 自分で調べ、考える姿勢	1,092	3.21	1.13
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	1,088	3.49	1.11
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	1,091	3.61	1.24
IV 2 授業全体の目標が明確だった	1,091	3.74	1.16
IV 3 学問的興味をかきたてられた	1,091	3.40	1.26
IV 4 この授業を受けて満足した	1,090	3.50	1.26

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表8 経営学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率* <sub>1</sub>	6,897	91.65	14.81
I 2 この授業に積極的に参加した	6,891	3.93	0.97
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	6,896	3.52	1.03
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	6,886	3.43	1.11
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	6,875	3.54	1.07
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* <sub>2</sub>	6,876	1.14	1.06
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	6,892	4.03	1.00
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	6,889	4.00	0.97
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	6,883	4.04	0.94
II 4 各回の授業内容は明確だった	6,881	4.06	0.93
II 5 十分な静粛性が保たれた	6,882	3.96	1.03
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	6,832	3.93	1.00
II 7 板書のしかたが適切だった	3,685	3.77	1.06
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	6,270	4.05	0.99
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	6,756	4.26	0.85
<b>III この授業から得るものができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	6,883	3.92	0.95
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	6,881	4.00	0.90
III 3 自分で調べ、考える姿勢	6,880	3.66	1.03
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	6,869	3.90	0.95
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	6,877	3.96	1.01
IV 2 授業全体の目標が明確だった	6,877	4.04	0.94
IV 3 学問的興味をかきたてられた	6,879	3.90	1.03
IV 4 この授業を受けて満足した	6,878	3.97	0.99

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表9 異文化コミュニケーション学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率 <sup>*1</sup>	376	97.02	7.42
I 2 この授業に積極的に参加した	375	4.22	0.88
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	375	3.92	0.91
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	375	3.64	1.06
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	374	3.51	1.11
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 <sup>*2</sup>	373	1.45	0.92
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	375	4.35	0.87
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	374	4.21	0.91
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	374	4.22	0.95
II 4 各回の授業内容は明確だった	375	4.27	0.86
II 5 十分な静粛性が保たれた	373	4.08	0.87
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	371	4.08	0.95
II 7 板書のしかたが適切だった	153	4.10	0.93
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	342	4.43	0.76
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	367	4.60	0.67
<b>III この授業から得るものができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	374	4.27	0.88
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	375	4.01	0.94
III 3 自分で調べ、考える姿勢	375	4.09	0.92
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	374	4.00	0.97
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	375	4.30	0.87
IV 2 授業全体の目標が明確だった	375	4.29	0.90
IV 3 学問的興味をかきたてられた	375	3.90	1.03
IV 4 この授業を受けて満足した	375	4.11	0.96

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表10 観光学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率 <sub>*1</sub>	1,286	92.97	11.90
I 2 この授業に積極的に参加した	1,290	3.98	0.92
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	1,287	3.26	1.03
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	1,289	3.09	1.08
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	1,281	3.53	1.01
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 <sub>*2</sub>	1,289	0.73	0.85
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	1,289	3.96	0.99
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	1,289	3.98	0.95
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	1,287	3.92	0.99
II 4 各回の授業内容は明確だった	1,284	3.94	0.96
II 5 十分な静粛性が保たれた	1,284	3.86	1.02
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	1,274	3.88	1.00
II 7 板書のしかたが適切だった	491	3.75	1.04
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	1,157	4.07	0.95
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	1,260	4.25	0.88
<b>III この授業から得るものができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	1,283	3.84	0.95
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	1,284	3.87	0.91
III 3 自分で調べ、考える姿勢	1,284	3.38	1.01
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	1,282	3.71	0.94
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	1,285	3.87	1.00
IV 2 授業全体の目標が明確だった	1,285	3.86	0.96
IV 3 学問的興味をかきたてられた	1,284	3.75	1.00
IV 4 この授業を受けて満足した	1,285	3.83	0.98
<b>V 学部等による設問</b>			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	1,267	4.24	0.95
V 2 この授業の受講者数は適切だった	1,264	4.09	1.02
V 3 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	1,260	4.15	0.97
V 4 わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識した	1,260	3.73	1.06
V 5 わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた	1,262	3.56	1.11
V 6 わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた	1,260	3.74	1.06

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表 1 1 コミュニティ福祉学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率* <sub>1</sub>	7,658	90.68	14.00
I 2 この授業に積極的に参加した	7,649	3.94	0.90
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7,646	3.41	0.99
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7,641	3.29	1.05
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	7,613	3.70	0.97
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* <sub>2</sub>	7,637	0.90	0.97
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	7,654	4.06	0.99
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	7,649	4.06	0.93
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	7,641	4.09	0.90
II 4 各回の授業内容は明確だった	7,641	4.11	0.90
II 5 十分な静粛性が保たれた	7,639	4.02	1.01
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,570	4.00	1.00
II 7 板書のしかたが適切だった	4,214	3.70	1.06
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	6,855	4.20	0.92
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	7,494	4.29	0.84
<b>III この授業から得るものができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	7,644	3.99	0.89
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	7,644	3.98	0.87
III 3 自分で調べ、考える姿勢	7,639	3.61	0.99
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	7,636	3.91	0.91
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	7,640	4.04	0.97
IV 2 授業全体の目標が明確だった	7,641	4.07	0.92
IV 3 学問的興味をかきたてられた	7,641	3.90	1.00
IV 4 この授業を受けて満足した	7,641	4.02	0.97

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表 1 2 現代心理学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率* <sub>1</sub>	2,433	90.83	14.18
I 2 この授業に積極的に参加した	2,430	3.87	0.95
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,427	3.22	1.04
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,426	3.17	1.09
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	2,413	3.71	0.99
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* <sub>2</sub>	2,420	0.75	0.89
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	2,429	3.98	1.03
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	2,431	4.16	0.85
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	2,429	4.08	0.92
II 4 各回の授業内容は明確だった	2,429	4.12	0.90
II 5 十分な静粛性が保たれた	2,425	3.96	1.07
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,403	4.00	0.99
II 7 板書のしかたが適切だった	1,186	3.74	1.02
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	2,099	4.34	0.81
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,371	4.43	0.73
<b>III この授業から得るものができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	2,430	4.07	0.90
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	2,430	3.95	0.92
III 3 自分で調べ、考える姿勢	2,430	3.42	1.07
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	2,428	3.80	0.98
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	2,429	4.03	1.01
IV 2 授業全体の目標が明確だった	2,429	4.08	0.92
IV 3 学問的興味をかきたてられた	2,430	3.96	1.01
IV 4 この授業を受けて満足した	2,430	4.06	0.96
<b>V 学部等による設問</b>			
V 1 この授業の受講者数は適切だった	2,378	4.11	0.94
V 2 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	2,377	4.29	0.82
V 3 現代心理学部の教育研究設備に満足している	2,374	4.04	0.94

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) II 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表13 全学共通カリキュラム

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率 <sup>*1</sup>	25,498	91.03	14.19
I 2 この授業に積極的に参加した	25,495	3.91	0.96
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	25,487	3.24	1.05
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	25,461	3.12	1.12
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	25,340	3.66	1.03
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 <sup>*2</sup>	25,440	0.78	0.92
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	25,496	4.12	0.98
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	25,496	4.12	0.91
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	25,482	4.11	0.92
II 4 各回の授業内容は明確だった	25,466	4.15	0.90
II 5 十分な静粛性が保たれた	25,445	4.10	0.99
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	25,191	4.02	0.99
II 7 板書のしかたが適切だった	12,706	3.74	1.05
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	23,330	4.29	0.89
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	24,969	4.38	0.79
<b>III この授業から得るものができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	25,464	3.99	0.94
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	25,457	3.90	0.93
III 3 自分で調べ、考える姿勢	25,456	3.44	1.06
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	25,411	3.82	0.99
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	25,457	4.08	0.97
IV 2 授業全体の目標が明確だった	25,449	4.09	0.92
IV 3 学問的興味をかきたてられた	25,456	3.93	1.02
IV 4 この授業を受けて満足した	25,450	4.03	0.99
<b>V 学部等による設問</b>			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	23,627	4.09	1.08
V 2 この授業の受講者数は適切だった	23,566	4.09	0.98
V 3 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	23,513	4.16	0.94
V 4 この授業の登録方法（次の中から選んでマークしてください）	—	—	—

⑤1次抽選登録 ④2次抽選登録 ③科目コード登録 ②その他 ①覚えていない

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

\*1) I1は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I6は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表14 学校・社会教育講座

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率 <sup>*1</sup>	1,772	94.14	10.57
I 2 この授業に積極的に参加した	1,774	4.15	0.88
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	1,772	3.53	0.99
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	1,774	3.41	1.05
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	1,758	3.65	1.00
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 <sup>*2</sup>	1,773	0.84	0.88
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	1,771	4.34	0.89
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	1,772	4.28	0.83
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	1,772	4.26	0.87
II 4 各回の授業内容は明確だった	1,768	4.32	0.85
II 5 十分な静粛性が保たれた	1,768	4.50	0.74
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	1,756	4.27	0.85
II 7 板書のしかたが適切だった	1,329	4.01	0.93
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	1,336	4.29	0.83
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	1,741	4.49	0.71
<b>III この授業から得るものができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	1,770	4.19	0.88
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	1,770	4.15	0.84
III 3 自分で調べ、考える姿勢	1,771	3.75	1.02
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	1,766	4.06	0.91
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	1,769	4.28	0.89
IV 2 授業全体の目標が明確だった	1,770	4.25	0.88
IV 3 学問的興味をかきたてられた	1,770	4.02	1.00
IV 4 この授業を受けて満足した	1,770	4.20	0.94

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) I1は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I6は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0



## 7-3 「グループ集計」科目一覧

表 1 5 経済学部

### グループ1

No.	科目名	学期
1	経済数学入門	春学期
2	経済数学入門	春学期

### グループ2

No.	科目名	学期
1	統計学1	春学期
2	統計学1	春学期

### グループ3

No.	科目名	学期
1	情報処理入門	春学期
2	情報処理入門	春学期
3	情報処理入門	春学期
4	情報処理入門	春学期
5	情報処理入門	春学期
6	情報処理入門	春学期
7	情報処理入門	春学期
8	情報処理入門	春学期
9	情報処理入門	春学期
10	情報処理入門	春学期
11	情報処理入門	春学期

### グループ4

No.	科目名	学期
1	経済情報処理A	春学期
2	経済情報処理A	春学期
3	政策情報処理A	春学期
4	財務情報処理A	春学期

### グループ5

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール1	春学期
2	基礎ゼミナール1	春学期
3	基礎ゼミナール1	春学期
4	基礎ゼミナール1	春学期
5	基礎ゼミナール1	春学期
6	基礎ゼミナール1	春学期
7	基礎ゼミナール1	春学期
8	基礎ゼミナール1	春学期
9	基礎ゼミナール1	春学期
10	基礎ゼミナール1	春学期
11	基礎ゼミナール1	春学期
12	基礎ゼミナール1	春学期
13	基礎ゼミナール1	春学期

**グループ6**

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール1	春学期
2	基礎ゼミナール1	春学期
3	基礎ゼミナール1	春学期
4	基礎ゼミナール1	春学期
5	基礎ゼミナール1	春学期
6	基礎ゼミナール1	春学期
7	基礎ゼミナール1	春学期
8	基礎ゼミナール1	春学期
9	基礎ゼミナール1	春学期
10	基礎ゼミナール1	春学期
11	基礎ゼミナール1	春学期
12	基礎ゼミナール1	春学期
13	基礎ゼミナール1	春学期
14	基礎ゼミナール1	春学期
15	基礎ゼミナール1	春学期
16	基礎ゼミナール1	春学期
17	基礎ゼミナール1	春学期
18	基礎ゼミナール1	春学期

**グループ8**

No.	科目名	学期
1	経済学	秋学期
2	経済学	秋学期
3	経済学	秋学期
4	経済学	秋学期
5	経済学	秋学期

**グループ9**

No.	科目名	学期
1	簿記	秋学期
2	簿記	秋学期
3	簿記	秋学期
4	簿記	秋学期
5	簿記	秋学期
6	簿記	秋学期
7	簿記	秋学期
8	簿記	秋学期
9	簿記	秋学期
10	簿記	秋学期

**グループ7**

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール1	春学期
2	基礎ゼミナール1	春学期

表 1 6 経営学部

**グループ1**

No.	科目名	学期
1	会計学入門	春学期
2	会計学入門	春学期
3	会計学入門	春学期
4	会計学入門	春学期

**グループ2**

No.	科目名	学期
1	ビジネス概論B	秋学期
2	ビジネス概論B	秋学期

**グループ3**

No.	科目名	学期
1	ビジネス概論A	秋学期
2	ビジネス概論A	秋学期

表 17 異文化コミュニケーション学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	Cultural Exchange	春学期
2	Cultural Exchange	春学期
3	Cultural Exchange	春学期
4	Cultural Exchange	春学期
5	Cultural Exchange	春学期
6	Cultural Exchange	春学期

表 18 コミュニティ福祉学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	社会学1	春学期

グループ2

No.	科目名	学期
1	ヒューマンサービス英語入門B	春学期
2	ウエルネス福祉論	春学期
3	現代キリスト教人間学	春学期
4	福祉文化論	春学期
5	情報処理3	春学期
6	家族社会学	春学期
7	人間心理の深層	春学期
8	セクソロジー	春学期
9	ライフサイクルの心理学	春学期
10	グリーンスタディ	春学期
11	社会福祉発達史2	春学期
12	公衆衛生学	春学期
13	リスクマネジメント論	春学期
14	公共哲学	春学期

グループ3

No.	科目名	学期
1	児童福祉論	春学期
2	福祉機器論	春学期
3	介護概論	春学期
4	公的扶助論	春学期
5	高齢者福祉論	春学期
6	地域福祉論1	春学期
7	福祉環境論	春学期
8	医療福祉論	春学期
9	精神保健福祉援助技術各論1	春学期
10	家族臨床心理学	春学期
11	社会福祉援助技術論2	春学期
12	社会福祉援助技術論4	春学期
13	福祉産業論	春学期
14	老年臨床心理学	春学期
15	精神保健学1	春学期

グループ4

No.	科目名	学期
1	国際NGO論	春学期
2	社会政策	春学期
3	経営組織論	春学期
4	健康政策	春学期
5	国際経済論	春学期
6	地方財政論	春学期
7	エスニシティ論	春学期
8	質的リサーチ	春学期
9	ソーシャルサポート論	春学期
10	社会問題の社会学	春学期
11	地域経済論	春学期
12	住宅政策	春学期
13	教育政策	春学期
14	自治体政策論	春学期
15	災害心理学	春学期
16	多文化社会論	春学期
17	NPO論	春学期

グループ5

No.	科目名	学期
1	生理学	春学期
2	運動方法学	春学期
3	解剖学	春学期
4	身体文化論	春学期
5	コミュニティスポーツ論	春学期
6	レクリエーション援助論	春学期
7	小児保健・精神保健	春学期
8	メンタルマネジメント	春学期
9	スポーツジャーナリズム	春学期
10	バイオメカニクス	春学期

グループ6

No.	科目名	学期
1	法学2	秋学期
2	心理学2	秋学期
3	社会教育施設論2	秋学期
4	社会教育計画2	秋学期

### グループ7

No.	科目名	学期
1	情報処理2	秋学期
2	キャリア形成論1	秋学期
3	キャリア形成論2	秋学期
4	コミュニティ福祉とキリスト教	秋学期
5	社会調査法	秋学期
6	人権論	秋学期
7	生涯スポーツ論	秋学期
8	いのちの倫理学	秋学期
9	老年学	秋学期
10	障害学入門	秋学期
11	家族心理学の基礎	秋学期
12	ファシリテーション論	秋学期
13	宗教人間学	秋学期

### グループ9

No.	科目名	学期
1	家族政策	秋学期
2	政策学の基礎知識	秋学期
3	コミュニティと文化	秋学期
4	逸脱と紛争の修復	秋学期
5	余暇生活論	秋学期
6	コミュニティ・ビジネス	秋学期
7	リーダーシップ論	秋学期
8	生命倫理政策入門	秋学期
9	行政学	秋学期
10	雇用と福祉	秋学期
11	障害者スポーツ論	秋学期
12	データ分析法	秋学期

### グループ8

No.	科目名	学期
1	家族福祉論	秋学期
2	発達障害論	秋学期
3	ソーシャルワーク論2	秋学期
4	心理学理論と心理的支援	秋学期
5	障害者福祉論	秋学期
6	介護技術論	秋学期
7	精神医学2	秋学期
8	精神障害者の生活支援システム	秋学期
9	就労支援サービス	秋学期
10	障害幼児ソーシャルワーク論	秋学期
11	社会福祉援助技術論3	秋学期
12	社会保障論	秋学期
13	福祉マネジメント論	秋学期
14	福祉情報論	秋学期
15	リハビリテーション論	秋学期
16	福祉学特論	秋学期
17	精神保健学2	秋学期
18	精神保健福祉援助技術各論2	秋学期
19	精神科リハビリテーション学1	秋学期

### グループ10

No.	科目名	学期
1	ウエルネス科学総論	秋学期
2	運動処方・療法	秋学期
3	運動生理学	秋学期
4	スポーツ科学総論	秋学期
5	アダプテッドスポーツ論	秋学期
6	スポーツコーチ学	秋学期
7	スポーツ社会学	秋学期
8	ストレングス・コンディショニング論	秋学期
9	ウエルネスプロモーション論	秋学期
10	スポーツビジネス論	秋学期
11	スポーツマネジメント論	秋学期



大学教育開発・支援センター 教学 IR 部会 (2016年9月現在)

部会長	原 田	久	(大学教育開発・支援センター長、法学部)
センター員	井 川	充 雄	(教務部長、社会学部)
	松 本	康	(社会学部長)
	都 築	誉 史	(現代心理学部)
	林	英 明	(教務部 全学共通カリキュラム事務室)
学術調査員	大 嶋	玲 未	(大学教育開発・支援センター)
事務局	遠 藤	裕 子	(総長室 教学改革課)
	佐 藤	百 恵	(総長室 教学改革課)

2015年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

委員長	河 村	賢 治	(教務部副部長、法務研究科)
事務局	遠 藤	裕 子	(大学教育開発・支援センター)
	佐 藤	百 恵	(大学教育開発・支援センター)
	上 原	裕 輔	(大学教育開発・支援センター)
	間 中	賢 治	(教務部 教務事務センター)
	竹 田	賢 太	(新座キャンパス事務部 教務課)

2015年度「学生による授業評価アンケート」報告書

---

2016年9月発行

編集 立教大学 2015年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1

TEL 03-3985-4624 FAX 03-3985-4615

<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/>

e-mail [cdshe@rikkyo.ac.jp](mailto:cdshe@rikkyo.ac.jp)



